

# 高宮遺跡

—寝屋川市大字高宮—

発掘調査概要報告

1986・3

寝屋川市教育委員会

# 高宮遺跡

—寝屋川市大字高宮—

発掘調査概要報告

1986・3

寝屋川市教育委員会

## 序 文

生駒山地西麓に派生した寝屋川市の東部丘陵地帯は、学史上有名な高地性集落の太秦遺跡や古墳時代終末期の国指定史跡石の宝殿古墳など、数多くの古代遺跡が今日に残されていることで、人々によく知られている地域です。

今回発掘調査を実施いたしました高宮の地は、河内平野を一望することができる景勝の地にあり、河内平野と枚方台地との接点に位置しています。過去の発掘調査によりこの地域は、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であるとともに、市内でも古くから人々が生活を営んでいた地であり、丘を中心として古代氏族による集落が形成され、彼らによって現在国指定史跡となっている高宮廃寺が創建されたことなど、古代の姿が明らかになりつつあります。

今回の発掘調査は、高宮廃寺跡の西側で、市道高宮・小路線の北側と、高宮廃寺跡の南端部の2地点において実施しました。

市道高宮・小路線の北側地は、昭和56年度に調査した調査地の西隣にあたり、先に発見した高宮廃寺の創建に直接かかわった古代氏族の居住区のひろがりと思われる掘立柱の柱穴を、今回の調査で発見することができましたことは、過去の調査で発見しております古代集落の全体像を明らかにする上で、大きな収穫であったと思われます。

今回の調査の実施にあたり、ご協力ご援助をいただきました土地所有者の方々をはじめ、地元の方々、大阪府教育委員会ならびに関係各位には心よりお礼を申しあげますとともに、直接調査に従事していただきました数多くの皆様に対しまして深く感謝の意を表す次第です。

昭和61年3月

寝屋川市教育委員会教育長職務代理者

教育次長 堀 家 盛 夫

## 例　　言

1. 本書は、寝屋川市教育委員会が昭和60年度国庫補助（総額3,000,000円、補助率—国庫50%、府費25%）を得て実施した大阪府寝屋川市大字高宮・大字小路所在の高宮遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、昭和60年10月28日着手し、昭和61年3月31日まで調査及び整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、大阪経済法科大学講師瀬川芳則を調査顧問とし、寝屋川市教育委員会社会教育課塩山則之を担当者とし、補助員として鶴林齐亨があたった。
4. 本書の作成については、塩山が執筆し、尖測・トレースは塩山、清水美紀、鶴林齐亨、浜田幸司が、写真撮影は塩山がそれぞれ行った。
5. 発掘調査の進行及び報告書の作成等については、大阪府教育委員会文化財保護課・堀江門也、玉井功、四條畷市教育委員会・野島稔、大阪府立南寝屋川高校・増崎勝敏、升谷喜世子、清水芳子、中田公子の諸氏をはじめ多くの方々から種々のご指導、ご教示を受けた。記して厚く感謝の意を表します。
6. 発掘調査の進行等については、土地所有者の永井政一、白井佐一郎の各氏、また地元高宮自治会には終始懇切なご協力を受けることができた。記して厚く感謝の意を表します。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

I 位 置 と 環 境 .....	1
II 調 査 に 至 る 経 過 .....	6
III 調 査 の 概 要 .....	9
IV 遺 物 .....	15
V 遺 物 観 察 表 .....	17
VI ま と め .....	20
図 版	

## 図 版 目 次

図版1 調査地位図	25
図版2 調査地1 平面図(1)	27
図版3 調査地1 平面図(2)	29
図版4 調査地2 平面図(1)	31
図版5 調査地2 平面図(2)	33
図版6 調査地1 断面図	35
図版7 調査地2 断面図	37
図版8 出上遺物実測図	39
図版9 出土遺物実測図	41
図版10 調査地1 近景	43
図版11 調査地1 遺構検出状況	45
図版12 調査地1 遺構全景	47
図版13 調査地1 遺構全景	49
図版14 調査地2 近景	51
図版15 調査地2 遺構検出状況(南側)	53
図版16 調査地2 遺構全景(南側)	55
図版17 調査地2 遺構検出状況(北側)	57
図版18 調査地2 遺構全景(北側)	59
図版19 竪穴式住居跡	61
図版20 土壙1	63
図版21 土壙2	65
図版22 掘立柱建物跡柱穴	67

図版23	柱 穴 断 面 .....	69
図版24	柱 穴 検 出 状 況 .....	71
図版25	遺 物 出 上 状 況 .....	73
図版26	遺 物 山 土 状 況 .....	75
図版27	遺物出土状況及び柱穴 .....	77
図版28	調 査 風 景 .....	79
図版29	出 上 遺 物 .....	81
図版30	出 土 遺 物 .....	83
図版31	出 土 遺 物 .....	85
図版32	出 土 遺 物 .....	87
図版33	出 土 遺 物 .....	89
図版34	出 土 遺 物 .....	91

### 挿 図 日 次

挿図1	高宮遺跡周辺遺跡分布図 .....	2
挿図2	竪穴式住居跡遺構図及び断面図 .....	10
挿図3	土壙1 遺構図及び断面図 .....	12
挿図4	土壙2 遺構図及び断面図 .....	13

## I. 位 置 と 環 境

高宮遺跡は、大阪府寝屋川市大字高宮・大字小路に所在しており、生駒山系の西側斜面から派生した洪積層の寝屋川市東部丘陵南端海拔28m前後の丘陵地形を中心として西と南に広がるその丘陵端部一帯に立地している。

この高宮遺跡の所在する丘陵頂部には、国指定史跡高宮廃寺跡が存在している。

高宮遺跡及び高宮廃寺跡の調査は、過去数回実施されており、その都度重要な遺物や遺構を発見している。

昭和28年には、大阪府教育委員会により高宮遺跡の一角に位置する高宮廃寺跡の発掘調査が東塔跡を中心として実施され、塔基壇・塔心礎等の遺構と軒丸瓦等の瓦類や土器類を検出した。出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦などから高宮廃寺は從来云われて来たよりも古く白鳳時代に遡って創建されたことが判明した。

その後、高宮遺跡周辺の発掘調査は実施されず表面踏査で、石鐵・石錐等の石器類や須恵器・土師器等の土器類が採集され、有望な遺跡が存在することが知られていた。

生駒山系の西麓に派生した台地は、おもに洪積世の大坂層群によって形成されており、北は京都府八幡市の八幡丘陵（男山丘陵）・枚方台地から、南は四條畷市の南野丘陵までつづく淀川左岸に形成された広大な丘陵及び台地であり、高宮遺跡及び高宮廃寺跡のある寝屋川市東部丘陵はほぼその中心に位置している。

この生駒山系西麓の丘陵（台地）地帯には、旧石器時代から各時期を通じて数多くの遺跡の存在が知られている。

旧石器時代には、有舌尖頭器、木葉状尖頭器、國府型のナイフ形石器、石核、翼状剥片、水晶製ナイフ形石器等を出土した八幡丘陵（男山丘陵）西麓の枚方市楠葉東遺跡、切り出し状の小型ナイフ形石器、國府型ナイフ形石器、搔器、石核、剥片などが出土した藤阪宮山遺跡、その藤阪宮山遺跡と鶴谷川をはさんで対峙する津田三ツ池遺跡では、國府型ナイフ形石器、小型ナイフ形石器、搔器、舟底形石器などが出土し、藤阪南遺跡からは木葉状尖頭器が出土しており、船橋川水系の北山遺跡からナイフ形石器、交北城ノ山遺跡から國府型ナイフ形石器、出屋敷遺跡からナイフ形石器、天野川水系の星ヶ丘西遺跡から舟底形石器、ナイフ形石器、村野遺跡から國府型ナイフ形石器、小倉東遺跡から小型舟底形石器、藤田土井山遺跡からは、有舌尖頭器がそれぞれ出土している。

交野市の神宮寺遺跡からは、國府型ナイフ形石器、有舌尖頭器、石核等が出土し、星田付近でも尖頭器が出土しており、布懸遺跡からは、小型のナイフ形石器、剥片等が出土している。寝屋川市の高宮遺跡からは、國府型ナイフ形石器、翼状剥片等が出土し、太秦遺跡では古墳の盛土内からナイフ形石器、打上の市立第四中学校裏手の丘陵端でナイフ形石



- |                   |                         |                     |                   |                            |
|-------------------|-------------------------|---------------------|-------------------|----------------------------|
| 1. 三井南遺跡          | 2. 秦山遺跡                 | 3. 秦河勝の墓            | 4. 池の瀬遺跡          | 5. 寝屋遺跡                    |
| 6. 寝屋東遺跡          | 7. 延喜式社内細屋<br>神社        | 8. 駐シ塚古墳            | 9. 太秦北遺跡          | 10. 太秦 1号壙<br>太秦遺跡・<br>出土地 |
| 11. 寝屋南遺跡         | 12. 神宮寺跡                | 13. 太秦庵寺跡           | 14. 動物ハニワ         | 15. 太秦古墳群                  |
| 16. トノ山(高塚)<br>古墳 | 17. 寝屋古墳                | 18. 打上遺跡            | 19. 雷神石<br>(石棺の身) | 20. 高良(打上)神社               |
| 21. 打上神社<br>古墳群   | 22. 石の宝殿古墳<br>(史跡)      | 23. 国守西遺跡           | 24. 国守遺跡          | 25. 延喜式内社<br>高宮神社          |
| 26. 高宮遺跡          | 27. 高宮廢寺跡<br>(史跡)       | 28. 延喜式内社<br>大社御祖神社 | 29. 小路遺跡          | 30. 更良川遺跡・<br>譲良寺跡         |
| 31. 北口遺跡          | 32. 忍ヶ岡古墳・延<br>喜式内社忍陵神社 | 33. 更良岡山<br>古墳群     | 34. 坪井遺跡          | 35. 忍ヶ丘駅前遺跡                |

挿図1 高宮遺跡周辺遺跡分布図

器がそれぞれ表面採集されている。四條畷市と寝屋川市の境界を流れる瀧良川河床に形成された四條畷市更良岡山遺跡では、大型両刃の鏃器、國府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器、削器、彫器、細石刃、舟底形石器、石刃、翼状剥片、石核等が出土し、木葉状尖頭器を出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡、生駒山地内の田原盆地の田原遺跡では尖頭器が出土し、忍陵遺跡ではナイフ形石器が出土するなど、20を越える旧石器時代の遺跡の存在が確認されている。

縄文時代になると、早期初めの編年基準となった尖底の押型文をつけた「神宮寺式土器」として学史上有名な交野市神宮寺遺跡、神宮寺式に後続する「穂谷式」の名で知られる枚方市穂谷遺跡、神宮寺式の隋円状押型文の原体を陰陽逆転して陰刻した土器を出土する大東市寺川堂山下遺跡があり、前期には、山形文や神宮寺式の押型文土器片、チャートを使った半磨製の魚形石鎌（所謂とろとろ）等を出土した枚方市穂谷遺跡をはじめ、津田三ツ池遺跡、寝屋川市高宮遺跡が知られている。中期になると、「キャリバー式土器」とよばれる中期の典型的な特徴をもつ土器を出土した交野市星田旭遺跡、船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡、砂遺跡があり、後期、晚期には、小児棺として使用された埋甕を出土した枚方市交北城ノ山遺跡、寝屋川市小路遺跡、中津式、滋賀里式、船橋式上器等を出土している四條畷市更良岡山遺跡が所在している。

弥生時代には畿内第Ⅰ様式古段階の壺及び甕をそれぞれ出土した四條畷市雁屋遺跡のか、田原遺跡、古代の交通ルートの要所にある大東市中垣内遺跡があり、現在発掘調査が進められている寝屋川市高宮八丁遺跡では、前期の畿内第Ⅰ様式中段階から中期の第Ⅲ様式の壺・甕等の土器類や石庖丁、石鎌等の石器類を多数出土している。その他、淀川河床の枚方市磯島先遺跡では前期の上器が採集されている。中期には、堅穴式住居と高床式の掘立柱建物跡や井戸からなる集落の一部と、42基の方形周溝墓の墓域が発見された枚方市交北城ノ山遺跡、炭化米が出土し高地性集落として有名な田の口山遺跡、甕の口縁部端部にキザミ口がめぐる畿内第Ⅱ様式の土器を出土し、河内平野と枚方台地の接点丘陵頂部に位置する高地性集落として学史上有名な寝屋川市太秦遺跡がある。

後期になると、淀川左岸地域の遺跡の数は膨大な数にのぼり、焼けおちた住居跡を検出した枚方市長尾西遺跡、津田城遺跡、集落と方形周溝墓の墓域を区画するV字溝等を検出した天野川水系の星ヶ丘西遺跡、シカを描いた土器片等を出土した藤田山遺跡、小型彷製重圓文鏡、分銅形土製品、手焙形土器、異形土器を出土し淀川を見おろす位置にある鷹塚山遺跡、六角形の堅穴式住居を検出した山之上天堂遺跡、淀川に面した低地の遺跡で近江系土器を出土する渚遺跡、弥生時代後期に成立し、古墳時代（ごろまで）継続する大集落の茄子作遺跡、海拔200mの山上に立地し通信基地的な性格がつよい交野市南山遺跡、寝屋川市においては、高宮遺跡の南約300mにある小路遺跡が知られている。

古墳時代には、前期に大野川河口付近の淀川をのぞむ台地上に築かれ、京都府椿井大塚山古墳出土の銅鏡と同范関係にある吾作銘四神四獸鏡など八面の銅鏡を出土した枚方市万年寺山古墳、三基の粘土櫛をもち画文帶環状乳神獸鏡・銅鐵・碧玉製の鐵形石製品等を出土した藤田山古墳、粘土櫛内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄製品等を出土した交野市妙見山古墳、交野山西麓の海拔100m前後に前方後円墳5基、円墳3基からなる森古墳群、全長約80mの前方後円墳で長さ約6.3m、幅約1m、高さ約0.7mの堅穴式石室を有する四條畷市忍ケ岡古墳が知られている。中期になると、ノヅチ伝承をもつ枚方市禁野車塚古墳、二重の空濠をもつ牧野車塚古墳、方形の周濠をめぐらす円墳や筒形銅器・巴形銅器・家形埴輪・横矧板紙留短甲を模した形象埴輪等が出土した交野市寺・車塚古墳群、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると、枚方市中宮古墳群、朱彩の横穴式石室をもつ白雉塚古墳、八基の円墳からなる交野市倉治古墳群、羨道をもたない片袖式の横穴式石室をもつ古墳で形成されている寺古墳群、寝屋川市においては、「神武東征伝承」と「野見宿彌の墓」の伝承をもつトノ山(尚塚)古墳、太秦1号墳、廻シ塚や水晶製切子玉・金銀環等を出土したゲンゲン谷古墳を含み、六鈴鏡・三環鏡・漆塗りの革製盾の残片等を出土した太秦古墳群、北河内地方最大規模の横穴式石室(無袖式)をもつ円墳の寝屋古墳、江戸時代『河内名所図会』に「八十塚(やそつか)」として紹介されているが後世の開墾等のためほとんどその姿を消してしまった打上古墳群、長さ約3m、幅1.5mの板状の花崗岩を下石とし、その上に直径約3m、高さ約1.5mの巨岩を置き奥行約2.3m、幅約0.9m、高さ約0.7m、開口部幅0.5mの両袖式の横口式石櫛がくりぬかれ、国の史跡に指定されている古墳時代終末期のものとして著名な石の宝殿古墳があり、蓋形埴輪のほか多数の埴輪を出土した四條畷市更良岡山古墳群がある。

穂谷川の旧河道右岸の自然堤防と氾濫原に営まれた枚方市藤阪南遺跡では、古墳時代前期の堅穴式住居や、後期の厩舎と考えられる1間×10間の細長い掘立柱建物跡や掘立柱の倉庫の跡が発見されており、切妻造りの家形埴輪や円筒埴輪等を出土した四條畷市岡山南遺跡、人物埴輪の頭部や蓋形埴輪を出土した古墳時代中期の忍ヶ丘駅前遺跡、5世紀後半の多量の製塙土器を出土した中野遺跡、石敷製塙がや方形周溝状の周溝内から四体分の小型の古代馬(蒙古系馬)の骨を出土した奈良井遺跡などの古墳時代の集落が知られている。

高宮庵寺跡西側に広がる高宮遺跡の所在する丘陵頂上付近では、一辺約1mの巨大な柱穴をもつ掘立柱建物群や一辺約4mの堅穴式住居群が発見されており、掘立柱建物群と堅穴式住居群とは長い柵列によって区画されていたようである。出土した遺物から、飛鳥・白鳳時代の集落遺跡で、この地に居住した人々によって白鳳時代初頭に高宮庵寺が創建されたことが推察されている。現在、高宮庵寺跡の西塔推定地には、天萬魂命を祭神とする延喜式内社大社御祖神社(おおもりみおやじんじゃ)が鎮座しているが、昭和55年に現

在の社殿北西約50mの旧社殿伝承地で実施した発掘調査において神社遺構と推定される2間×3間の掘立柱建物跡を検出している。さらに西約150mには、江戸時代護良郡の一の宮とされ天萬魂命の子神を祭神とする延喜式内社高宮神社が鎮座している。

古代寺院関係の遺跡としては、四天王寺創建時の瓦を焼いた6基の瓦窯が発見されている八幡丘陵西麓の枚方市楠葉瓦窯（京都府八幡市では平野山瓦窯と呼称）、九頭神廃寺、中山観音寺跡、百濟寺南遺跡、特別史跡百濟寺跡、父野市長法寺跡、寝屋川市太秦廃寺跡、高柳廃寺跡、寝屋川市と四條畷市にまたがる護良寺跡、四條畷市正法寺跡などが知られており、その他、中世以降の遺跡の数は膨大な数にのぼるようになる。

以上のごとく、淀川左岸地域（北河内地方）の各市において注目すべき遺跡の分布がみられる。

## II. 調査に至る経過

高宮遺跡の所在する高宮の丘陵は、生駒山系西麓に派生する洪積層の寝屋川市東部丘陵南端、北東から南西へゆるやかに傾斜した海拔28m前後の丘陵地形で、丘陵の比較差は約20mあり、河内平野と枚方台地へとつなぐ丘陵（台地）の接点に位置している。

この高宮の丘陵頂部には、国の史跡に指定されている「高宮廃寺跡」が所在している。

高宮遺跡の一角を占める高宮廃寺跡の所在する地には、現在延喜式内社大杜御祖神社が鎮座している。この大杜御祖神社境内には、散在する礎石や建物跡と推定される土壇及び多くの古瓦の散布により古くから古代寺院跡の存在が知られていたが、昭和28年に大阪府教育委員会が本格的な発掘調査を実施するまでは不明な点が多い遺跡であった。

昭和28年に大阪府教育委員会によって実施された東塔跡推定地の発掘調査では短期間の調査であったが多人の成果をあげ、從来の出土遺物から高宮廃寺の創建は奈良時代前期（天平時代）と推定されていたが、この調査で白鳳時代に属する素弁八葉蓮華文軒丸瓦、複弁八葉蓮華文軒丸瓦等の出土により創建時期が白鳳時代に遡ることが判明し、東塔跡の塔心礎・礎石及び一辺約10.5mの塔基壇を検出した。

その後、昭和54年に寝屋川市教育委員会が発掘調査を実施するまでは、本格的な発掘調査が行われなかった。

昭和54年寝屋川市教育委員会が実施した高宮廃寺跡範囲確認調査により、金堂跡・講堂跡・回廊跡・中門跡の一部などの主要伽藍の規模及び位置関係を明らかにすることができた。さらに、廃寺跡の主要建物の各所から創建時に使用された素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、当廃寺は短期間に主要伽藍が建設されたことが明らかになった。

また、出土瓦等から当廃寺は、数回の火災にあい、奈良時代末期あるいは平安時代初頭に廃絶し、のちに旧講堂跡を利用して謙倉・室町時代に延喜式内社大杜御祖神社の神宮寺として再び法灯がともされたことが判明した。

以上の調査の結果、遺構の保存状況も良く北河内における古代寺院のあり方を知る上においても重要であるため、昭和55年5月13日付をもって国の史跡指定を受けるに至った。

高宮廃寺跡の所在する高宮の丘陵上の畠地では、從来から石織・石錐等の石器や須恵器・土師器・瓦器等の土器類の遺物が採集されており、遺跡の存在する可能性が指摘されていた。昭和54年に実施した高宮廃寺跡範囲確認調査の際にも、高宮廃寺跡金堂跡の下層から須恵器や土師器の出土を見ている。

昭和55年高宮廃寺跡の西側に広がる丘陵南斜面の畠地一帯に宅地開発の計画があり、事前の発掘調査を実施することになった。

調査の結果、縄文時代から中世に亘る時期の遺物、遺構を発見した。縄文時代の遺構と

しては、長辺約3m・短辺約1.5m・深さ約60cmの陥円形で舟底型をした土壙や落ち込み状遺構を検出し、その内先の土壙内からは薄手の縄文式土器片・石鏃・サヌカイトの剥片等を出土した。

その他、一辺約1mの掘りかたの巨大な柱穴が9ヶ所並ぶ2間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする掘立柱建物跡5棟や、一辺約4mの竪穴式住居跡5棟や多くの柱穴を発見した。この掘立柱建物群と竪穴式住居とは、北東から南西方向に走る長い柵列によりほぼ区画された集落構造を呈していた。出土遺物から、これらの集落が古墳時代末期から飛鳥・白鳳時代の時期のものであり、この地に居住した古代氏族により高宮廃寺が創建され、高宮廃寺跡下層出土の遺物などからも、氏寺を造営するために彼らの居住地を氏寺神並立の地として提供したことが推察され、この高宮遺跡のもつ重要性が指摘された。

これら検出した掘立柱建物跡の内、一辺約1mの巨大な掘りかたの柱穴をもつ高床式の掘立柱建物跡の遺構は、現在児童公園内に修景して保存されている。

その後、高宮遺跡は数度の発掘調査が実施され、その都度重要な遺物・遺構が発見されて多くの成果を上げその全容が明らかになりつつある。

現在高宮廃寺跡の西塔と推定されている地には、天萬魂命を祭神とする延喜式内大社御祖神社が鎮座しているが、鎮座地の西北約50mの隣接地に旧宮地と伝承されている一画があり、第2次調査として実施した発掘調査の結果、周辺の畠地より一段高くなっている地から創建期の神社社殿遺構と推察される桁行5.7m、梁行4.2mで3間×2間の南面する東西棟の掘立柱建物跡を発見した。さらに、この旧宮地伝承地の東側では、建物の長辺20m以上、短辺15m以上で棟の示す方向がN50°Wという5間×4間以上の巨大な掘立柱建物を検出した。この巨大な建物跡は、昭和55年に実施した宅地開発の事前調査で発見した2間×3間の掘立柱建物跡の北約50mに位置し、その柱穴の掘りかたも同様に一辺が約1m以上あるもので、棟の示す方向もほぼ同じ方向であり出土遺物からも同時期のものと推察される。

第3次調査は、第2次調査の南側において実施し、同様の巨大な掘りかたをもつ柱穴の建物跡と多くの柱穴及び占墳時代後期の竪穴式住居跡と長辺約2.5m×短辺約1.7m×深さ0.4mの立方体の土壙を検出した。その立方体の土壙内からは、趣が1点出土している。

昭和57年度に実施した第4次調査では、ナイフ形石器をはじめ縄文式土器及び石鏃・サヌカイトの剥片、その他須恵器・上師器・瓦器等を出土している。ナイフ形石器の出土は高宮の丘陵上では初めてであり、かつ生駒山系西麓における旧石器時代の研究に寄与するものである。ナイフ形石器は、後年丘陵南側端部で実施した第5次調査においても出土した。縄文式土器は、昭和55年の調査で出土したように土壙内から出土しており、先の調査のものと同様に薄手のものであり、この発見は縄文時代の遺跡の広がりを示すものである。

そして、少數ではあるけれども円筒埴輪片が出土していることから、この高宮の丘陵上ではこれまでに古墳は発見されていないけれども、かってこの丘の上に古墳が築造されていた可能性を示唆するものである。周辺の古墳としては、この高宮の丘陵に北隣する太秦の丘陵尾根上には古墳時代後期の円墳で「野見宿禰の墓」と「神武東征の將軍の墓」という二つの伝承をもつトノ山（高宮）古墳を盟主墳とする太秦古墳群が存在している。さらにこの調査において、高宮廃寺西南側がかつて谷間地形であったことも判明し、その断面観察から古代氏族の集落形成時に谷は埋められ平坦にされ、その後さらに氏寺としての高宮廃寺造営時に再度整地されたことも判明した。

さらに高宮の丘陵南側端部付近の水田で実施した第5次調査では、丘陵頂上部付近で検出した掘立柱建物跡と同時期と推定される掘立柱建物跡を数棟や石組の井戸を検出し、集落が丘陵端部の南へさらに広がる様相を呈していた。

その他、平安時代の集落の一部も検出し、なかでも長辺2.7m×短辺2.2m×深さ3.1mの井戸は木枠の施設をもっており、井戸の底に横板二段の井筒の上に「コ」字型に削り抜いた井筒材を一枚組み合せて据えた「削抜プラス横板井戸」である。

この井筒内より「保延六年」（1140年）の墨書きのある曲物の桶が出土し、同時に曲物直下から瓦器碗が出土しており、瓦器碗の編年研究上貴重な資料となるものであり、井戸の祭祝等の研究においても新たな資料を提供するものである。

高宮廃寺跡の西南の谷間地形端部で実施した第6次調査では、約20cmから人頭大の花崗岩を4～6段構築した石組遺構を検出している。この石組遺構は、類似する東大阪市西ノ辻遺跡の例や地形等の立地条件から推察すると、谷間を利用した貯水池的な水利施設と考えられ、その出土遺物及び断面観察から8世紀末頃には使用されなくなっていると推察された。このことは、この高宮の丘陵を中心として形成された古代氏族の集落の営みとも密接な関係をもち、古代の水利施設を考える上において今後の検討課題になるとともに新たな資料を提供するものとなった。

### III. 調査の概要

今回の調査は、史跡「高宮廃寺跡」主要伽藍の西側の地と、廃寺跡の所在する北東から南西へ傾斜した丘陵の端部付近（史跡指定地の南側）において実施した。

#### 1. 丘陵端部・調査地1（大字小路293番地）

この調査地1は、北東から南西方面に傾斜する高宮の丘陵南面端部付近の、海拔16m前後で、史跡高宮廃寺跡指定地の南に位置しており、高宮廃寺跡の主要伽藍の所在する丘陵頂部との比高差は約12mあり、本来はゆるやかに北から南方向に傾斜していたものであろうが、後世の削平により段状を呈している。

調査地の基本層序は、耕土・茶褐色砂質土層・地山となっている。地山面は、ほぼ平坦であり、耕土から約10~20cmで地山面に達する。

調査地は、後世の削平のためか全体が平坦になっており、遺物包含層も非常に薄く、出土遺物も少数にすぎない。

##### 遺構

###### a. 溝状遺構

調査地の南端で検出した。溝状遺構は、幅約30cm、深さ約10cm~15cm、長さ約6.5mで東から西方向に傾斜しておりU字型を呈している。

東側は、後世の削平が著しくわずかに痕跡をとどめる程度である。

溝状遺構内からは、少数の土師器片を出土したのみで、時期決定までには至らなかつた。

###### b. 掘立柱建物跡

調査地東半分の全域で検出した。柱穴は、それぞれ一辺約1m前後の大型のものであるが、後世の削平のためか柱穴底部が数センチ残っている程度で、遺存状況は良くない。

柱穴の方向は、東西方向のものと若干方位がずれるものに大別できる。

掘立柱建物跡は、数度に亘る建て替えが考えられ、その時期及び規模については遺構の残存状況も悪く、出土遺物も少量であるため不明であるが、過去の調査において検出している掘立柱建物跡の柱穴の遺構と同規模であることなどから飛鳥・白鳳期のものと推定される。

#### 2. 丘陵頂上部・調査地2（大字高宮314番地）

この調査地2は、高宮の丘陵頂上部の平坦地で、海拔26m前後に位置している。

調査地の東側は、史跡高宮廃寺跡の指定地であり、高宮廃寺跡西側回廊の西約20mの所である。

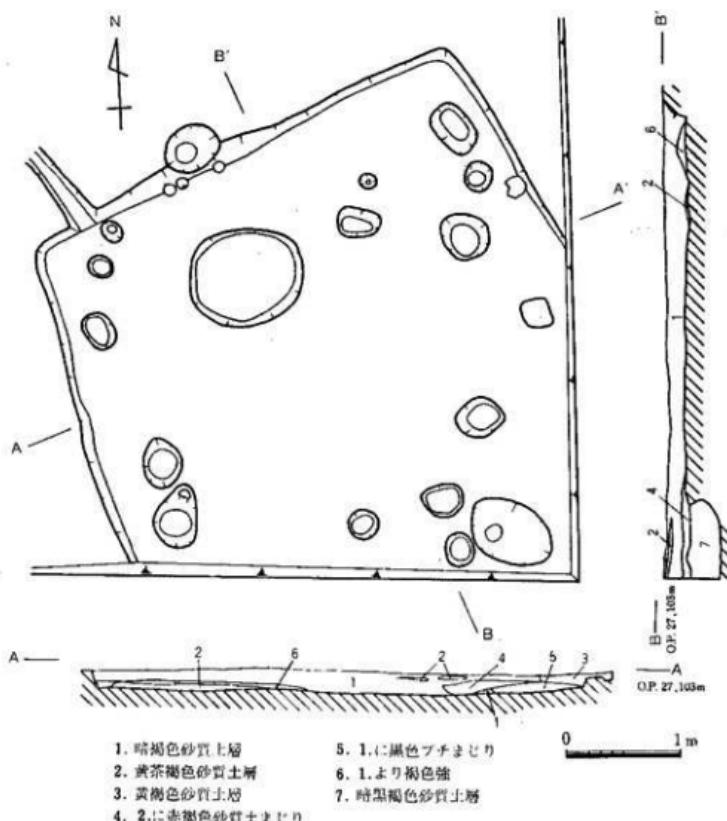
調査地の基本層序は、耕土・茶褐色砂質土層・暗茶褐色砂質土層・褐色砂質土層・地山となっており、地山は北から南へゆるやかに傾斜している。

### 遺構

#### a. 堅穴式住居跡（挿図2）

調査地南東隅で検出した。堅穴式住居跡は、軸をN-22°--Wに取り東西4m×南北4m+αを計る方形の住居跡である。

住居跡には、17個の柱穴と1個の貯蔵穴をもつ。柱穴は、住居跡内のみにみられ、住居跡の周囲等にはこの住居跡に附隨するものは検出されていない。



挿図2 堅穴式住居跡遺構図及び断面図

各々の柱穴及び貯蔵穴内には、暗茶褐色砂質土が堆積していたが、柱自体は検出されていない。

炉跡は検出することができなかつたが、住居跡内東壁付近の床面に焼土の広がりが認められた。

貯蔵穴は、直径1m、深さ0.5m、底部径0.8mを計り、掘り方は上口より底部に垂直に近い角度で落ち込んでいた。

住居跡の北壁掘り方壁面において、須恵器の蓋杯が3点出土した。これらの出土した蓋杯より住居跡は、7世紀後半のものと考えられ、今回検出した住居跡の東約10mの地点で過去に検出している竪穴式住居跡と同時期のものと推定される。

#### b. 土 壤

調査地中央付近で2基検出した。

##### 土壤1（挿図3）

竪穴式住居跡の北に隣接した位置で検出し、長軸を東西に取り長軸3.6m、短軸2.6m、検出時の深さ0.33mで梢円形を呈し、土壤の掘りかたは土壤上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦に近い舟底形である。

土壤内には、大きく5層の堆積がみられ、暗褐色砂質土層・暗茶褐色砂質土層・灰褐色砂質土層・灰茶褐色砂質土層・黄褐色砂質土層にわけられる。

土壤内からは、須恵器の蓋杯・高杯の他、土師器片が数点出土するのみである。

##### 土壤2（挿図4）

土壤1の西に隣接し竪穴式住居跡の北西約3mの位置で検出した。

平面形は隅丸の正方形に近い形を呈し、長軸を東西に取り、長軸2.2m、短軸2.0m、検出時の深さ0.5mを計る。

土壤の掘りかたは、土壤上口より底部にゆるやかな傾斜で落ち込み、底部は平坦で、東西0.4m、南北3.5mの正方形に近い形を呈している。

土壤内には大きく5層の堆積層がみられ、暗褐色砂質土層・灰褐色砂質土層・茶褐色砂質土層・灰茶褐色砂質土層・黄褐色砂質土層にわけられる。

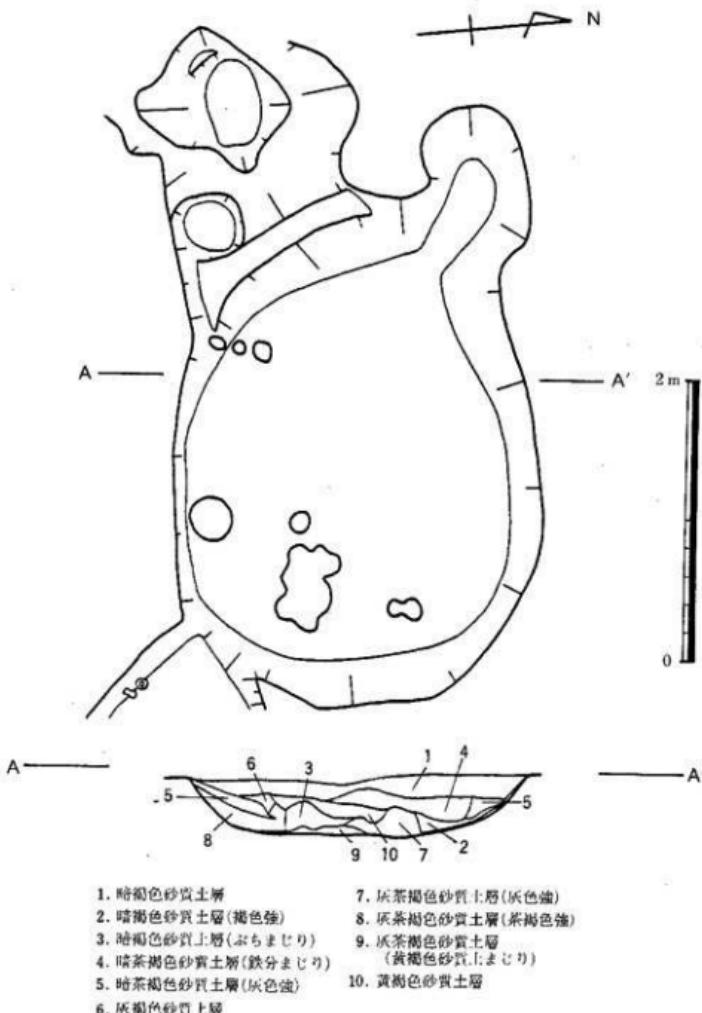
土壤内より、土師器片・須恵器片を検出したほか、底部に須恵器1点を検出した。

#### c. 掘立柱建物跡

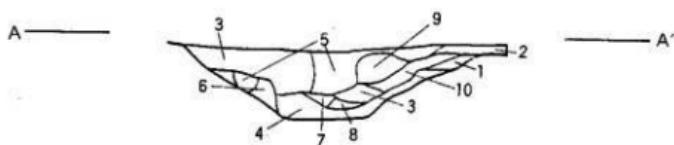
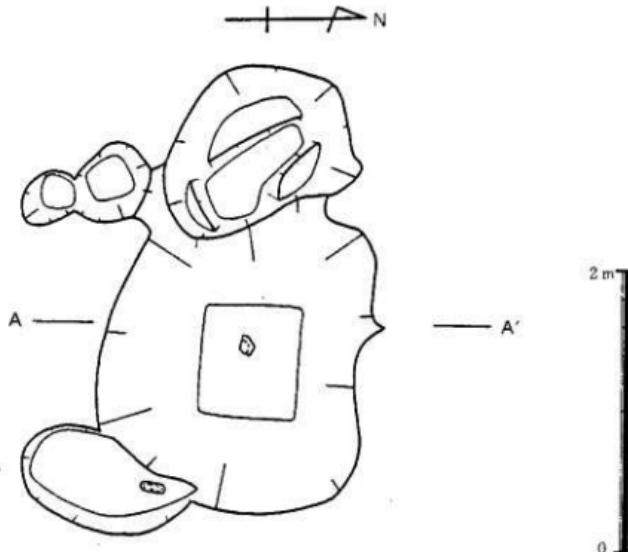
調査地の北西部で2棟分検出した。

##### 掘立柱建物跡1

建物の大部分は、調査対象外の西への広がりを示しているため建物全体の規模は充分に確認することはできなかつたけれども東西2間(5.4m)×南北3間(9.4m)以上で、主軸の示す方向はN-61°-Wである。



插図3 土壌1 遺構図及び断面図



- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 暗褐色砂質土層        | 6. 灰茶褐色砂質土層(ぶちまじり)    |
| 2. 暗褐色砂質土層(淡)     | 7. 黄褐色砂質土層            |
| 3. 灰褐色砂質土層        | 8. 黄褐色砂質土層(鉄分まじり)     |
| 4. 茶褐色砂質土層(やや灰褐色) | 9. 黄褐色砂質土層(ぶちまじり)     |
| 5. 灰茶褐色砂質土層       | 10. 茶褐色砂質土層(灰色砂質土まじり) |

挿図4 土壌2 遺構図及び断面図

東西方向の柱間は2.7m、南北方向の柱間はそれぞれ北から3.2m、3.2m、3.0m、を計る。柱穴は、柱穴上口長辺約1.5m短辺約1.2mの長方形を呈し、深さ約0.3~0.9mを計る。

#### 掘立柱建物跡2

小型の建物跡で、東西2間(2.4m)×南北2間(2.5m)の正方形を呈した建物跡であり、主軸の示す方向はN-61°-Wである。

柱間は、それぞれ約1.2m、柱穴は一辺約0.3~0.4mで、深さ約0.2~0.4mを計る。

#### d. 柱 穴

調査地の全域で検出している。柱穴の規模は、直径約0.1~0.5m、深さ0.1~0.5mを計り、方形のものと円形のものに大別される。

柱穴は、調査地の南区域に集中して分布しており、北へ行くほどその分布の数は少なくなっている。

柱穴は、掘立柱建物跡のものと考えられるが、数度に亘る建て替え等のため、その規模及び時期については、柱穴内からの出土遺物も数点の土師器片、須恵器片を除いて出土していないため不明である。

## IV. 遺 物

今回の調査地の内、調査地1については、後世の削平が激しく遺物包含層も薄く、また遺構の遺存状況も悪いため、遺構内からの遺物は少數の須恵器片、土師器片を除いては出土しておらず、図化するに至っていない。

調査地2についても、出土する遺物は少片であるため復原可能で図化できる遺物についてのみ報告しておきたい。

### 須恵器

#### 蓋杯（身）（図版8・29-1～3）

(1・2)は、たちあがりは内傾してのび、端部は鋭く、受部は上外方にのび、端部は丸くとじている。(1)の底体部はやや浅く底部は丸味をもっている。(2)の底部は、平坦に近い形状を呈している。(3)は、体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸く仕上げている。底部は平らに近い形を呈している。

#### 蓋杯（蓋）（図版8・29-4～8）

(4)は、天井部に擬宝珠様のつまみを付す。天井部は丸く、内面に端部の丸い内傾するかえりを有している。(5～7)は、口縁部は下外方に下り、端部は丸く仕上げている。(5・7)は、天井部は低くやや丸味をもっている。(6)は、天井部は低く平らに近い形を呈している。(5)は体部の1/3のところに沈線を有している。

(8)は、口縁部は下外方に下るが、端部は欠損のため不明である。

#### 高杯（図版8・30-9）

脚部はゆるやかに外反して下外方に下り、端部で屈曲させ、さらに下方へ屈曲させて段をなしている。杯部については、欠損しているため形状は不明である。

#### 杯（図版8・30-10）

体部、口縁部については欠損のため不明であるが、底部に糸切りの痕が残っている。

### 土師器

#### 椀（図版9・30-11・12・14）

(11)は、平坦な底部を有し、体部はゆるやかな立ち上がりをみせ、口縁部は直立ぎみで口縁端部は丸くとじられている。(12)は、体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反して口縁端部は丸くとじられている。内面にはヘラミガキ暗文が施されている。(14)は、体部は底部から直線的に外上方にのび、口縁端部は丸く仕上げられている。低い高台を有し、高台と体部の接合部には指頭圧痕が残されており、粘土の接合痕が明瞭に認められる。

### 甕 (図版 9・30-13)

口縁部は外彎して斜上方にのび、口縁部中央がややふくらみをもっており、口縁端部は丸くとじている。洞部外面には縱方向の刷毛目を施している。

### 瓦 器

#### 瓦器椀 (図版 9・30-15)

体部は内彎気みに立ちあがり、口縁部でやや外反する。底部は欠損しており不明であるが、細い小さな断面三角形の高台を付すものであろう。内外面の暗文は風化がはげしく不明である。

### 石 器

#### 石 鐵 (図版34-1・2)

2点出土しており、石材は両方ともサヌカイトである。2点とも凹基無茎式のものである。

(1) は、逆刺が横に張っており鋭く、小型の石鐵である。周辺には、小さな調整剥離が施されている。(2) は、逆刺が欠損して不明である。全体に荒い剥離である。中央断面は、扁平な菱形を呈している。

## V. 遺物観察表

### 須恵器

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
蓋	8.29 1	口 径 12.7 器 高 3.5 受部 径 10.6 底体部高 3.3	・立ちあがりは内傾してのび端部は鋭い。受部は上外方にのび端部は丸い。 ・底部はやや浅く丸味をもつ。 ・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・外面底体部は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	・色 調 青灰色 ・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地 2 暗茶褐色砂質土層
		口 径 12.6 器 高 3.0 受部 径 10.8 底体部高 2.7	・立ちあがりは内傾してのび端部は鋭い。受部は上外方にのび端部は丸い。 ・底部は平坦に近い。 ・マキアゲ、ミズビキ調整。 ・外面底部はヘラ削り未調整、他は回転ナデ調整。	・色 調 (内)青灰色 (名)青灰色 ・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地 2 土壌 1
		口 径 9.2 器 高 3.0	・体部、口縁部は上外方にのび端部は丸い。 ・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	・色 調 青灰色 ・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地 2 塗穴式住居跡
杯(身)	8.29 3	口 径 9.3 器 高 2.7 つまみ 径 1.8 つまみ高 0.8	・口縁部は外下方に下り、端部は丸く内傾するかえりを有し、かえり端部はやや丸い。天井部は丸い、天井部中央には擬宝珠様のつまみを付す。 ・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・天井部は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	・色 調 青灰色 ・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地 2 塗穴式住居跡
		口 径 11.4 器 高 5.3 天井部高 1.2	・口縁部は下外方に下り端部は丸い。天井部は低くやや丸味をもつ。 ・体部のところに沈線を有する。 ・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・天井部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	・色 調 青灰色 ・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地 2 暗茶褐色砂質上層

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
蓋 杯(蓋)	8.29	口 径 11.3	・口縁部は下外方に下り端部は丸い。天井部は低く平らに近い。	・色 調 灰色
		器 高 3.5 (残存高)	・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・天井部回転ヘラ切り調整、他は回転ナデ調整。	・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好 ・調査地2 落ち込み 10.4
	7	口 径 10.5	・口縁部は下外方に下り端部は丸い。天井部はやや丸味をおびている。	・色 調 青灰色
		器 高 3.3	・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・天井部回転ヘラ切り調整、他は回転ナデ調整。	・胎 土 良質、密 1 mm台の小砂粒を含む
				・焼 成 良好、堅緻 ・調査地2 桧穴式住居跡
	8.29		・口縁部は下外方に下るが端部は不明、天井部は平らに近い。	・色 調 青灰色
			・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・天井部回転ヘラ切り調整、他は回転ナデ調整。	・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好、堅緻 ・調査地2 土壌1
	8.30	杯部残存高 2.3	・脚部はゆるやかに外反して下外方に下り、端部で屈曲しさらに下方へ屈曲させ段をなしている。	・色 調 灰色
		杯部 径 3.2	・マキアゲ、ミズビキ成形。 ・回転ナデ調整。	・胎 土 良質、密 ・焼 成 良好 ・調査地2 土壌1
高 杯	9	脚 底 径 8.0		
		脚 部 高 2.2		
	8.30	器 高 (残存高) 3.5	・マキアゲ、ミズビキ、成形 ・底部に糸切りあり	・色 調 灰青色 ・胎 土 良質、密 1 mm以下の白色砂粒を含む
	10	底部 径 8.3		・焼 成 良好 ・調査地2 土壌2

### 土 師 器

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
碗	9.30	口 径 9.2	・平坦な底部を有し、体部はゆるやかに立ちあがり、口縁部は直立ぎみで口縁端部は丸くとじる。	・色 調 淡黄褐色
		器 高 3.0	・内外面ナデ調整。	・胎 土 良質 ・焼 成 良好 ・調査地2 暗茶褐色 砂質土層
	11			

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
椀	9.30	口径 11.2 高 3.8	・体部は内彎気味に立ち上り口縁部はやや外反する。 ・内面にヘラミガキ暗文が施されている。	・色調 明橙色 ・胎土 良質 ・焼成 良好 ・調査地2 暗茶褐色 砂質土層
	12			
	9.30	口径 15.8 高 4.8	・体部は底部から直線的に外上方にのび、口縁端部は丸くとじている。 ・体部内外面ともナデ調整。 ・高台の接合部に指頭圧痕がみられ粘土の接合痕が明瞭に残る。	・色調 淡茶褐色 ・胎土 良質 ・焼成 良好 ・調査地2 暗茶褐色 砂質土層
	14			
	9.30	口径 12.4 高 8.7 (残存高)	・口縁部は外轉し、斜上方にのびる。 ・口縁部中央がふくらみ、端部は丸くとじている。 ・胴部外面に縱方向の刷毛目、他は風化のため不明。	・色調 (内)淡黄褐色 (外)茶褐色 ・胎土 良質 ・焼成 良好 ・調査地2 壁穴式住居跡
	13			

### 瓦器

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
椀	9.30	口径 10.8 高 2.7 (残存高)	・体部は内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。 ・内外面の暗文は風化がはげしく不明であるが内部に若干残存している。	・色調 灰色 ・胎土 灰白色、 精良
	15			・調査地2 土壌1

### 石器

種類	図版番号	現存長(mm)	最大幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)	石質	備考
石 鏡	34 1	18	14	3.5	0.6	サヌカイト	
	34 2	32	19	5	3.1	サヌカイト	

## VII. まとめ

今回実施した調査地は、北東から南西方向に傾斜する高宮の丘陵南面端部付近の史跡高宮廃寺跡指定地の南と、丘陵頂上部の平坦部史跡高宮廃寺跡西回廊の西約20mの地点である。

今回の調査は、宅地開発に伴う緊急発掘調査であり、当該地は旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。特に白鳳時代創建の高宮廃寺を氏寺とし、延喜式内社大社御祖神社及び延喜式内社高宮神社を氏神とする古代氏族の氏寺造営地とその居住地とが顕著に示されている遺跡である。

高宮廃寺跡の主要伽藍の規模等については、昭和28年大阪府教育委員会が実施した東塔跡の発掘調査で東塔基壇は一辺約10.5mであることが判明し、昭和54年寝屋川市教育委員会が実施した高宮廃寺跡範囲確認調査により、回廊基壇は一辺約4.8m、金堂基壇は東西13m×南北12mであることが明らかとなった。これらの成果より、各堂塔間の距離は、東・西両塔の心心距離が約27m、塔と金堂の心心距離は約22.5m、金堂と講堂の心心距離が約30m、中門と塔の心心距離が約15mであることが明らかになってきている。

また、この高宮の丘陵を中心に営まれてきた巨人な掘りかたの柱穴をもつ掘立柱建物群及び竪穴式住居と構成された古代氏族の集落の姿も明らかになりつつある。氏寺造営のために自らの居住区域を提供した事実は、集落遺跡と古代寺院の関係、すなわち寺院造営に直接かかわった古代氏族と氏寺氏神社造営地との関連を明確に示すものであろう。

しかし、築地及びその他の関連する建物を含む寺域全体の規模等についてはまだ未解明な部分を残している。

今回実施した調査地1は、位置的には高宮廃寺主要伽藍の立地する丘陵の端部にあたり、南門の南で寺院伽藍の外にあたる所である。

調査地は、後世の削平が著しく遺構をほとんど止めていない状況であったけれども、柱穴底部をわずかに残している掘立柱建物の大型の柱穴を数多く検出することができた。

掘立柱建物跡の時期及び規模等については、遺構の残存状況も悪く、出土遺物も小片であるため不明ですが、過去の調査成果よりその時期が丘陵頂部に形成された高宮廃寺を建立した古代氏族の柵列で囲まれた巨大な柱穴をもつ掘立柱建物群や、丘陵端部南西域で検出している掘立柱建物群と同時期と考えられ、飛鳥・白鳳期におけるこの高宮の丘陵を中心として形成された集落の広がりを示すものであり、さらに高宮遺跡が南及び東へ範囲が広がる可能性を示唆するものである。

調査地2は、高宮の丘陵頂上部の平坦地で海拔26m前後に位置している。

この調査地では、竪穴式住居跡1棟、土壤2基、掘立柱建物跡2棟、その他柱穴を多数

検出することができた。

今回検出した大型の掘立柱建物跡は、その建物の大部分は調査対象外の西への広がりを示しているために、建物全体の規模等については充分に確認することはできなかったけれども、主軸はN—61°—Wを示し、東西2間×南北3間以上のものであり、それぞれの柱穴は一辺約1m以上を計るものである。

これらは、過去の調査において検出している掘立柱建物跡に匹敵し、現在児童公園内に修景保存している掘立柱建物跡と同規模、同時期のものと推察される。今回の掘立柱建物跡の発見は、これら掘立柱建物群の範囲のひろがりを確認するとともに新たな資料を加えるものである。

今回検出した竪穴式住居跡は、軸をN—20°—Wにとり東西約4m×南北4m+αを計る方形の住居跡である。

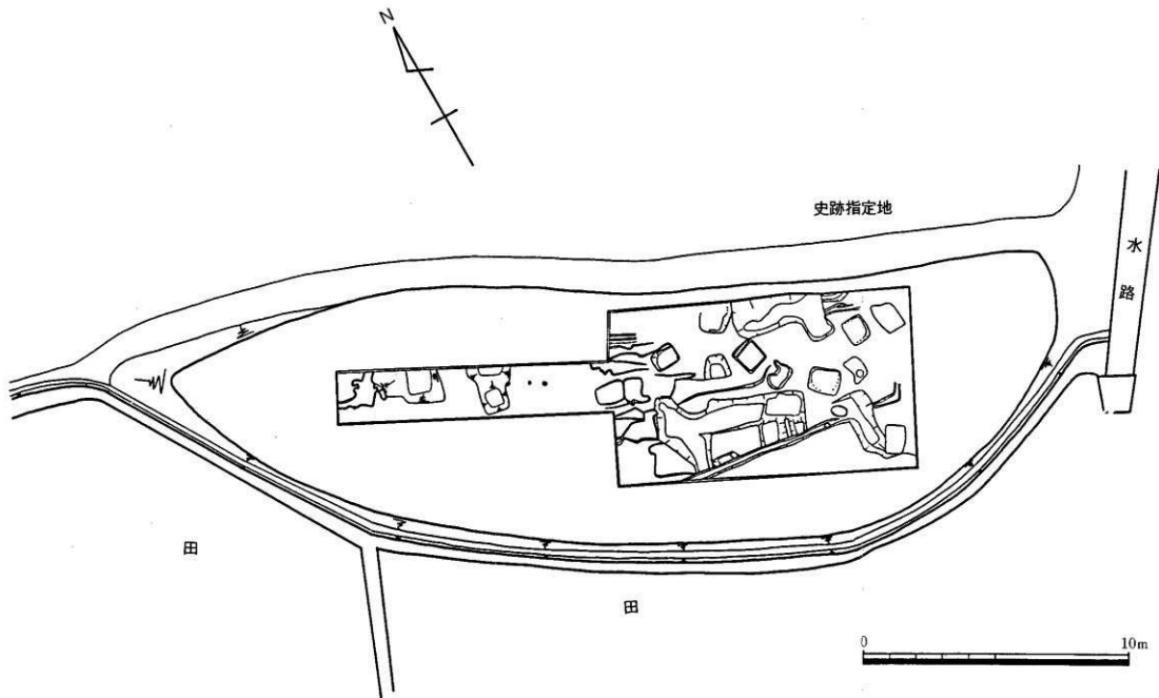
この竪穴式住居跡は、住居跡北壁掘り方壁面において出土した須恵器の蓋杯から、7世紀後半の時期のものであり、過去に今回検出した住居跡の東約10mの地点においても同時期の竪穴式住居跡1棟を検出している。

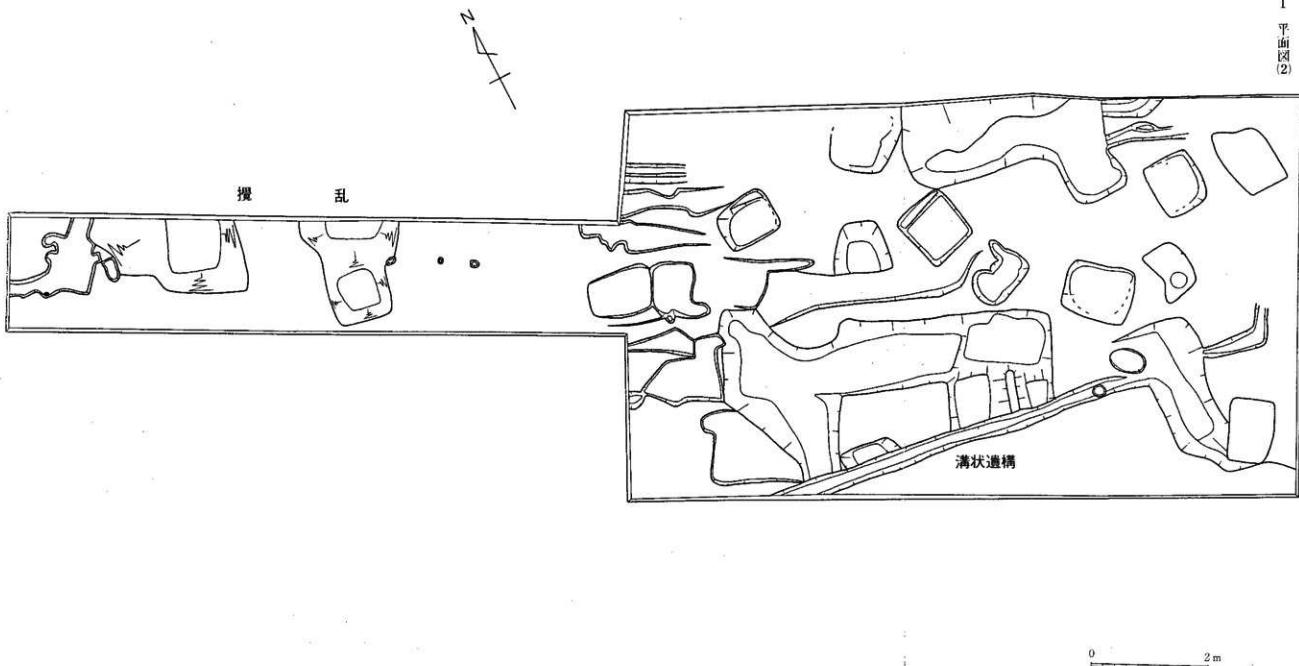
これらの竪穴式住居跡は、東に所在する白鳳時代創建の高宮廃寺建立の前後の時期にあたり、古代氏族とその氏寺建立を考える上において新たな資料を加えるとともに、今後の検討課題となるであろう。

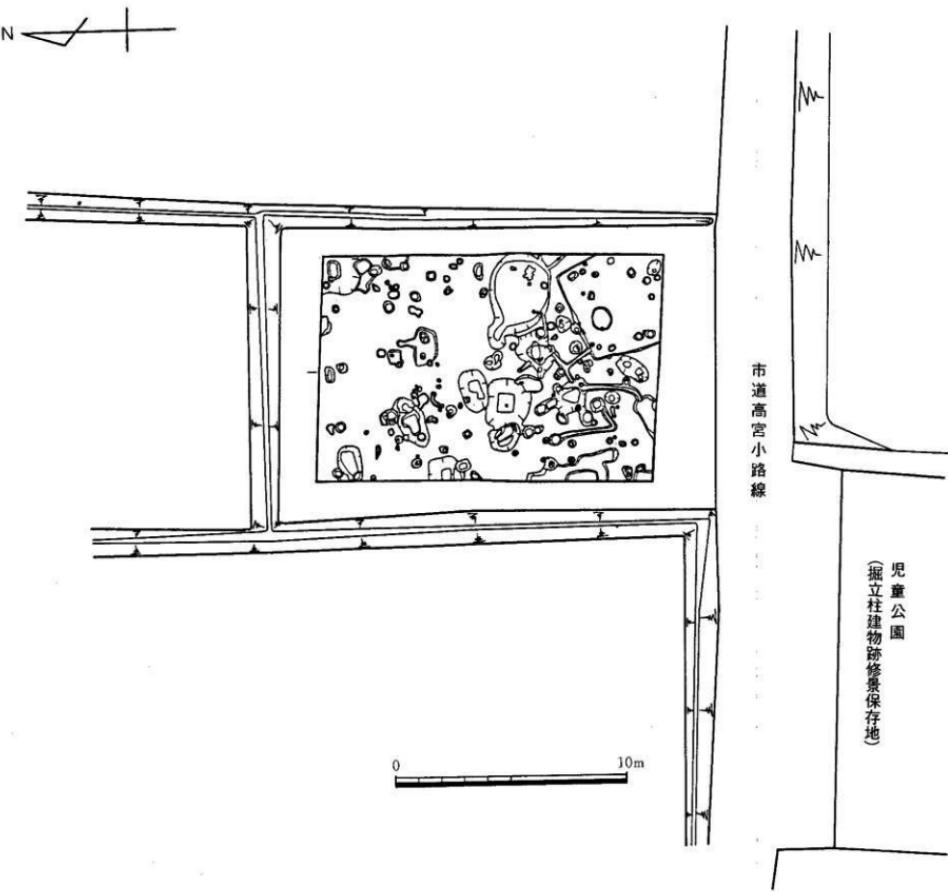
# 図 版

図版1 調査地位置図

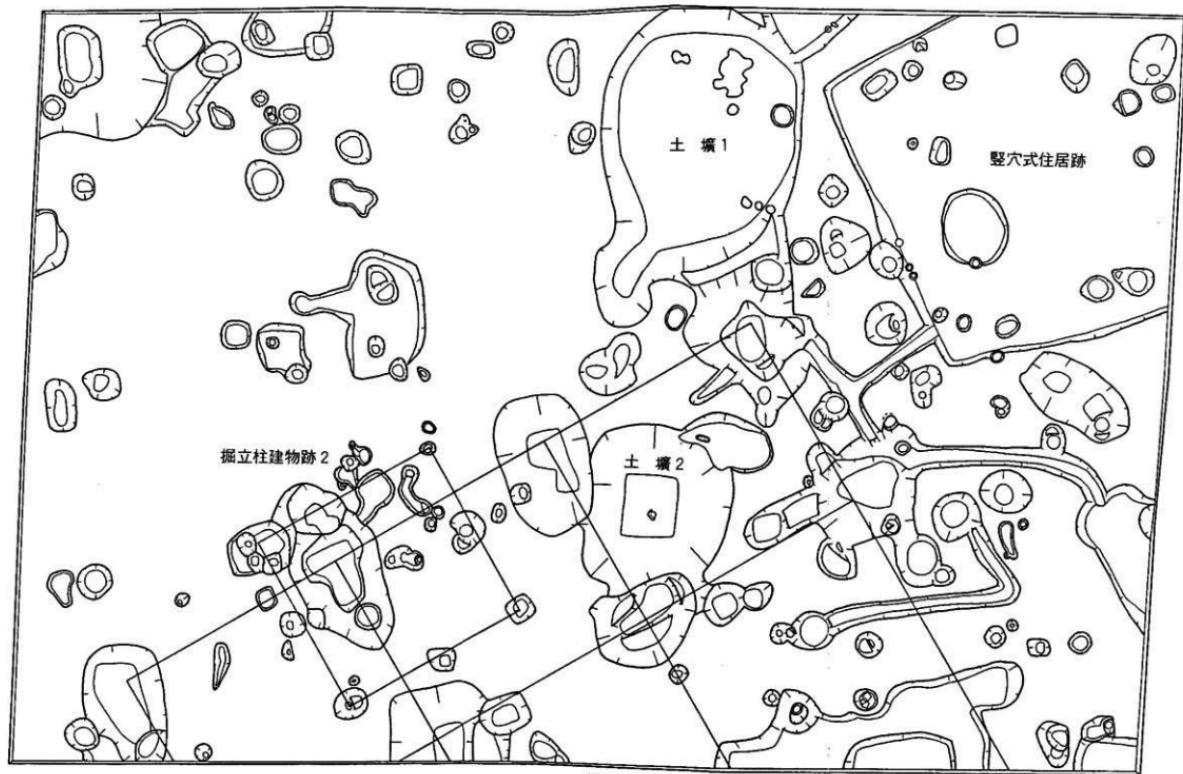






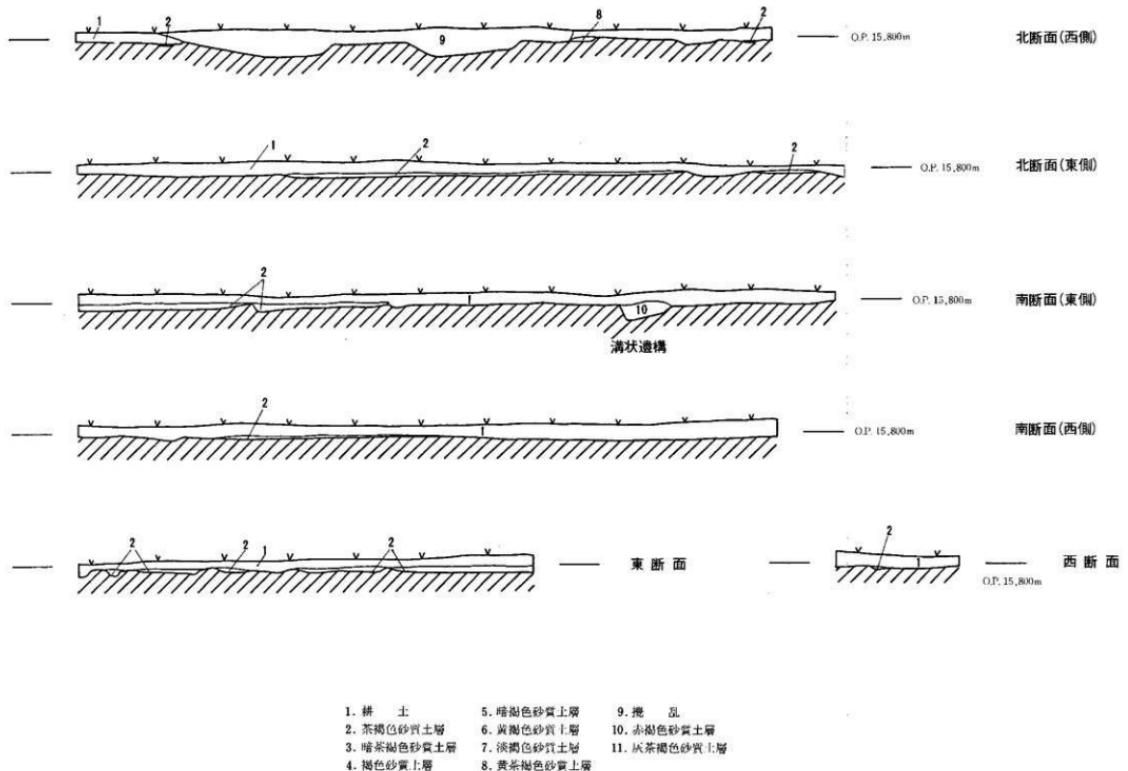


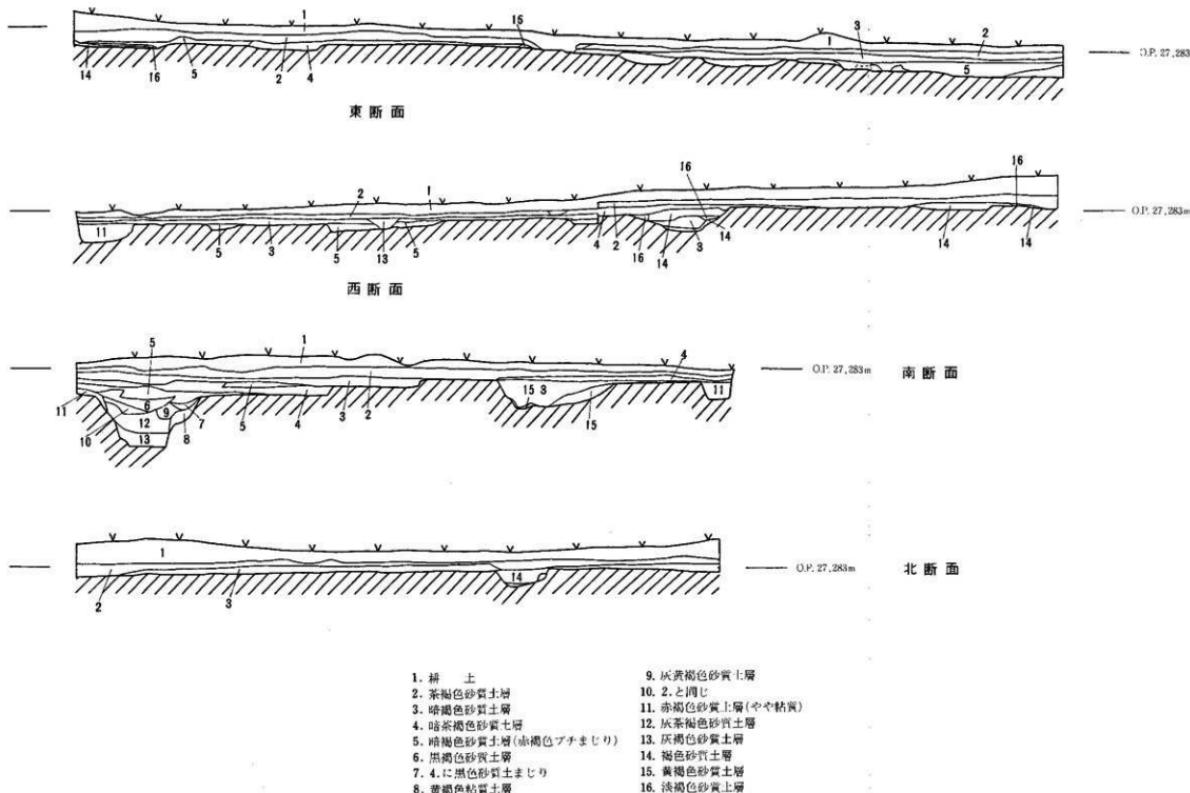
N ← +



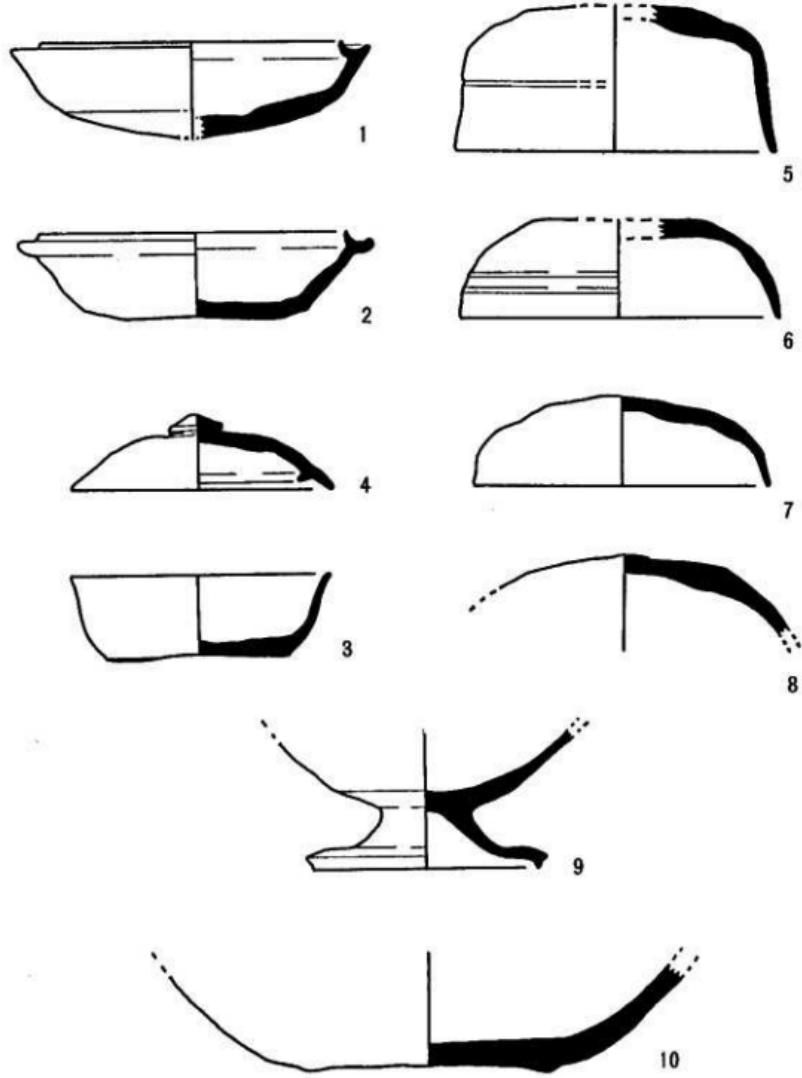
掘立柱建物跡 1

0 2m

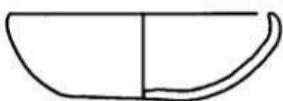




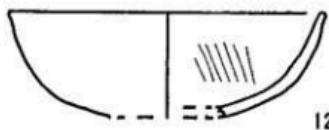
図版8 出土遺物実測図



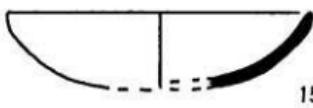
0 10cm



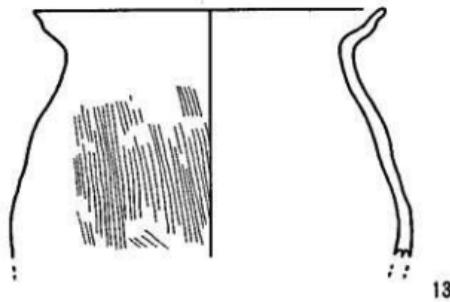
11



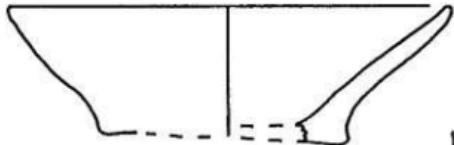
12



15

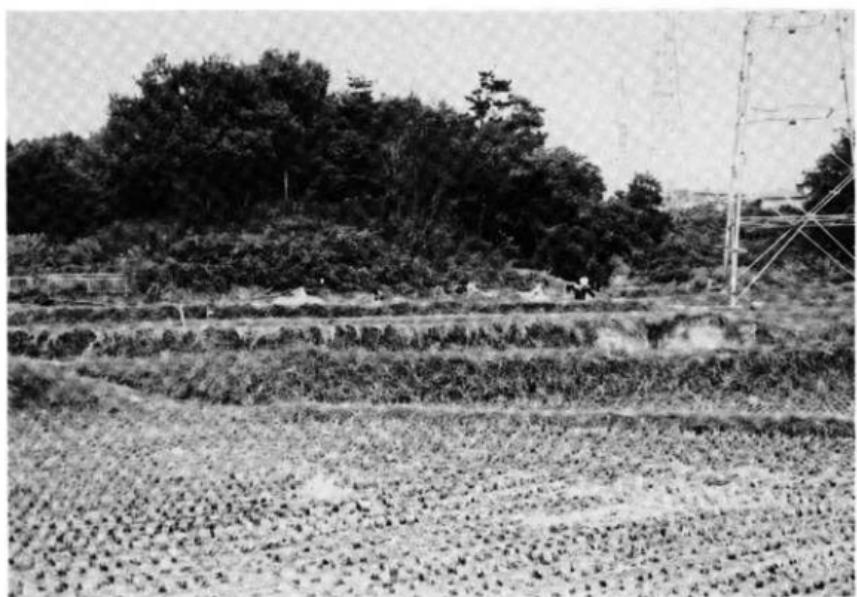


13



14

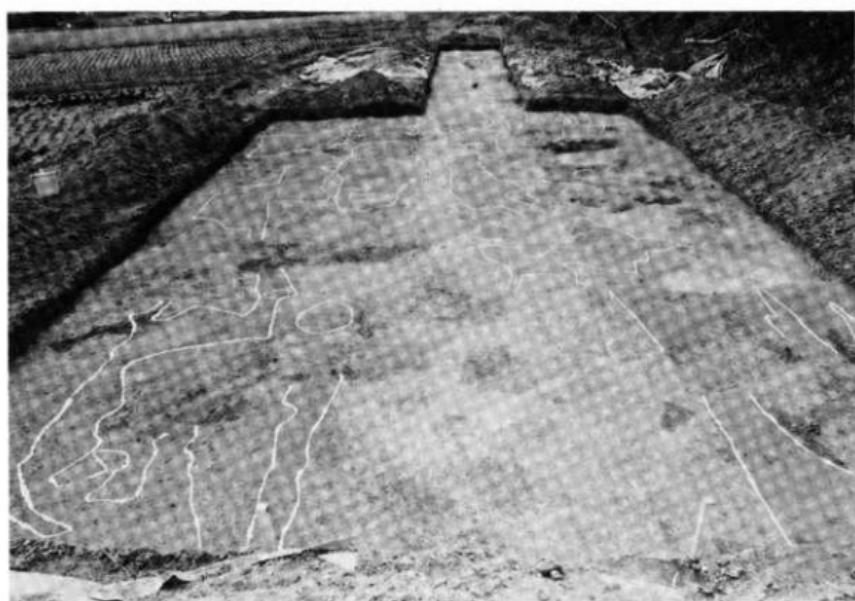
0 10cm



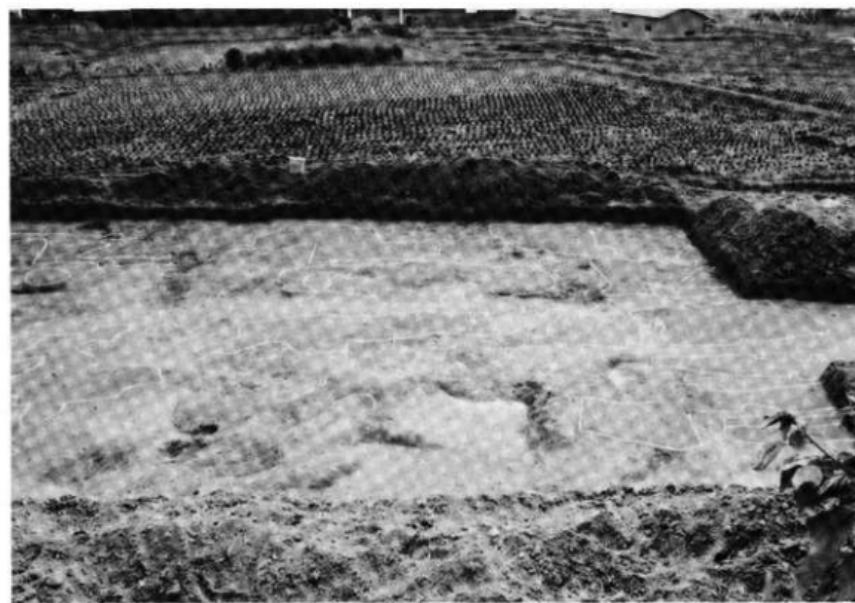
南より



東より



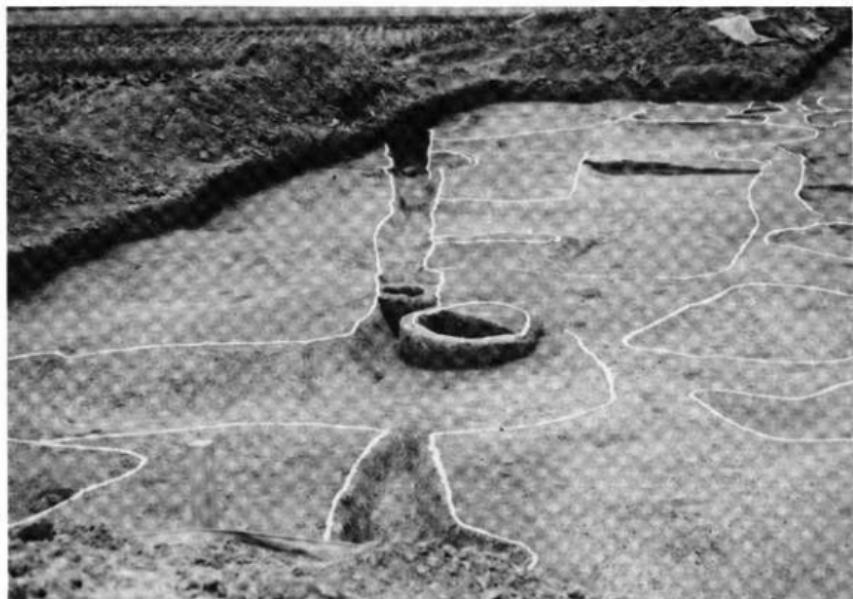
東より



北より



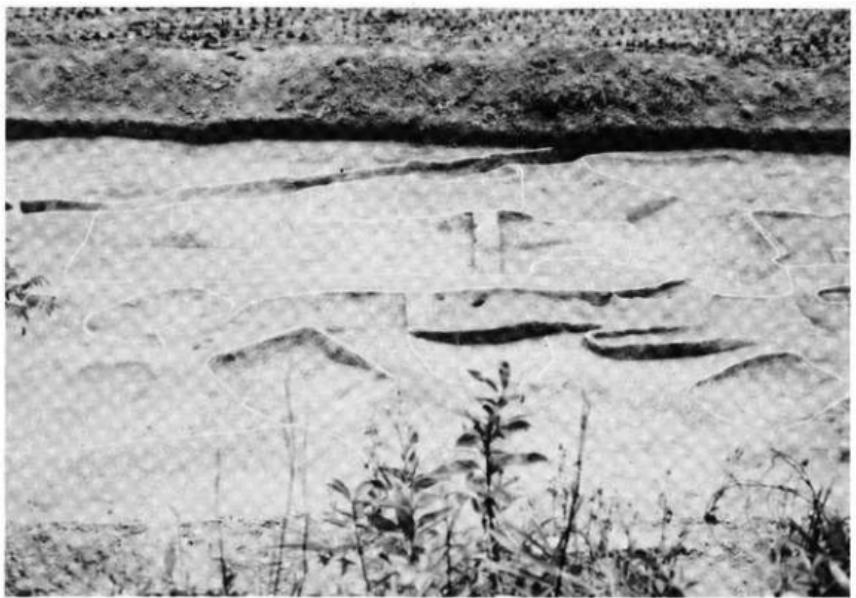
東より



溝状遺構



南より



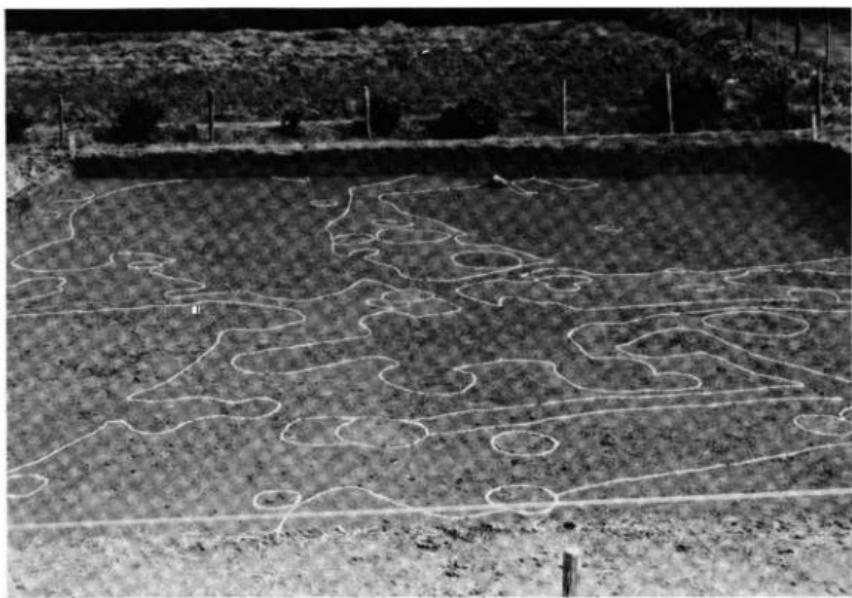
北より



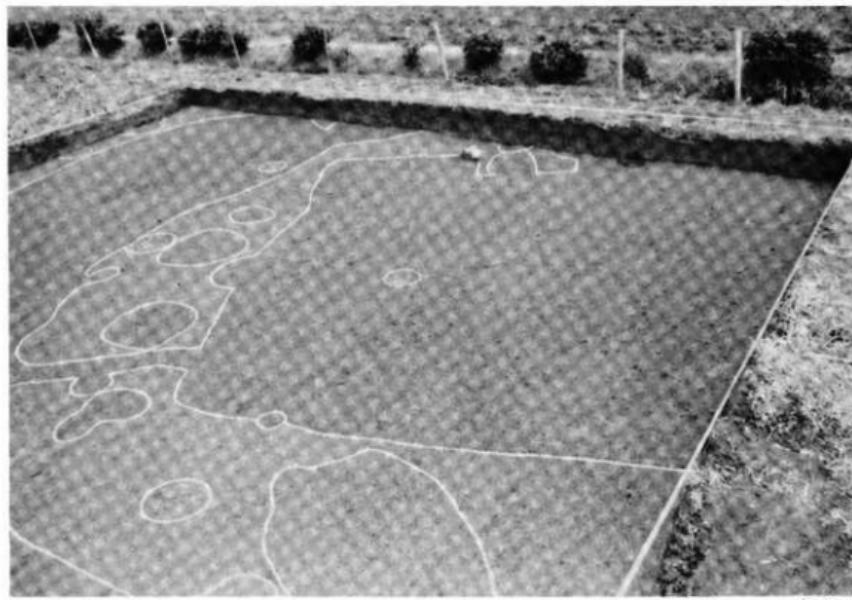
南より



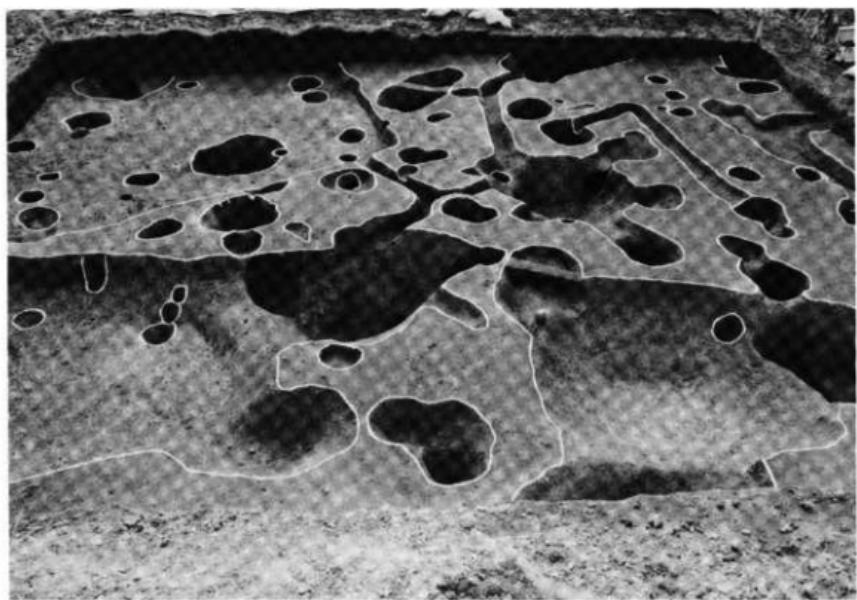
東より



西より



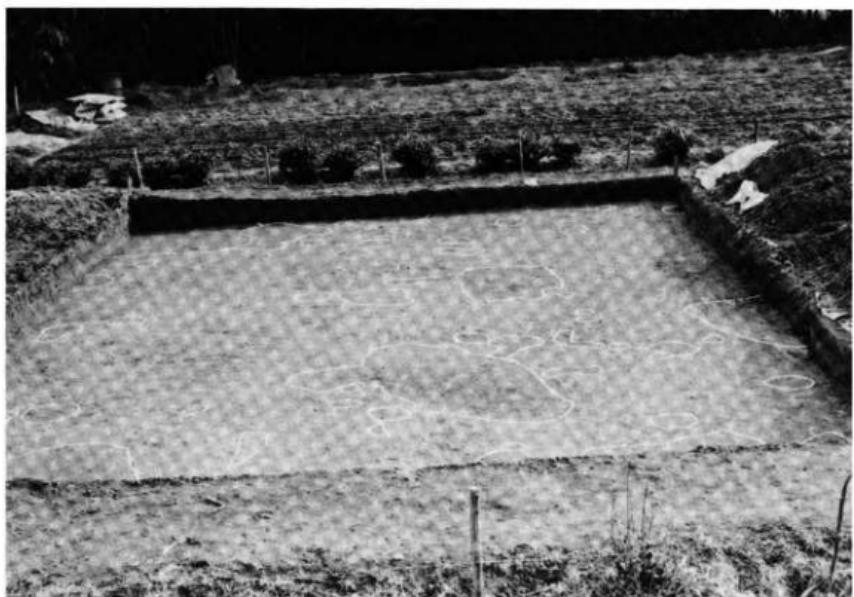
南西より



北より



南より



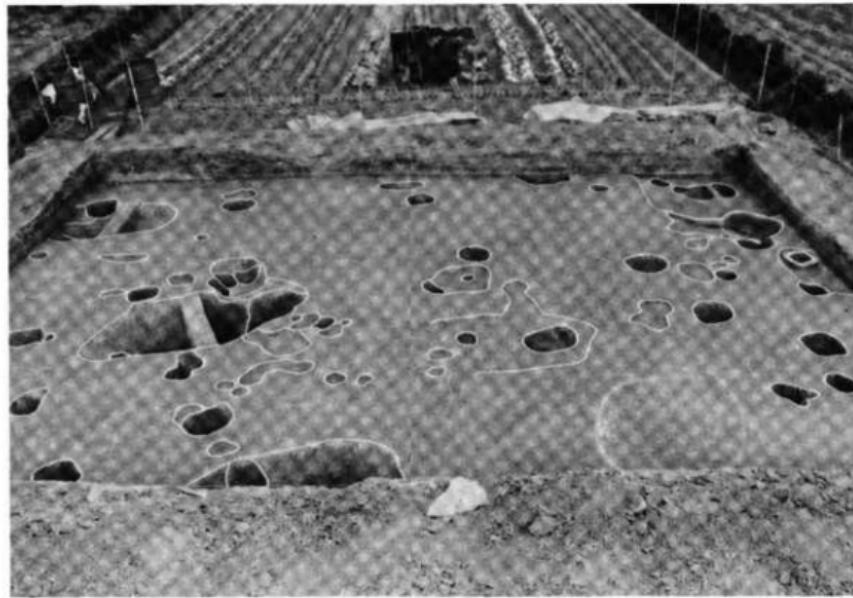
西より



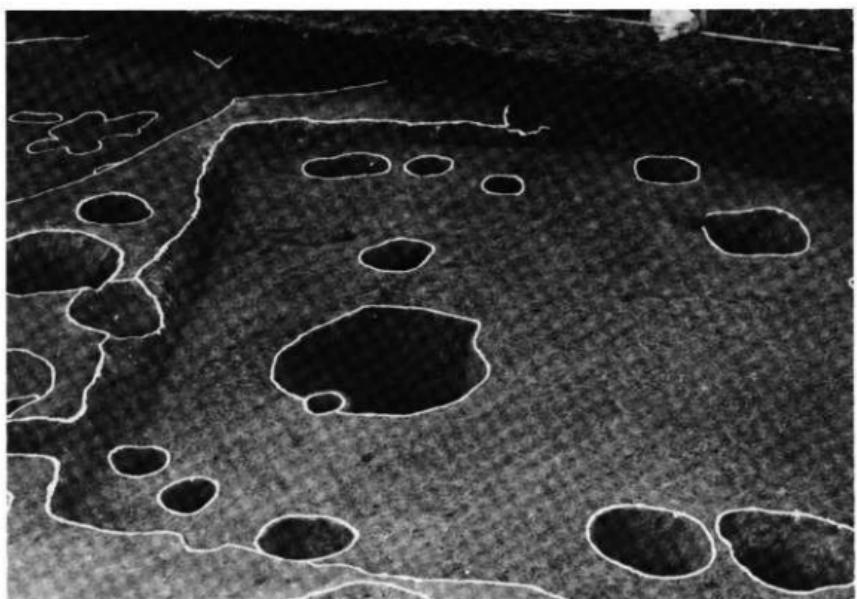
北より



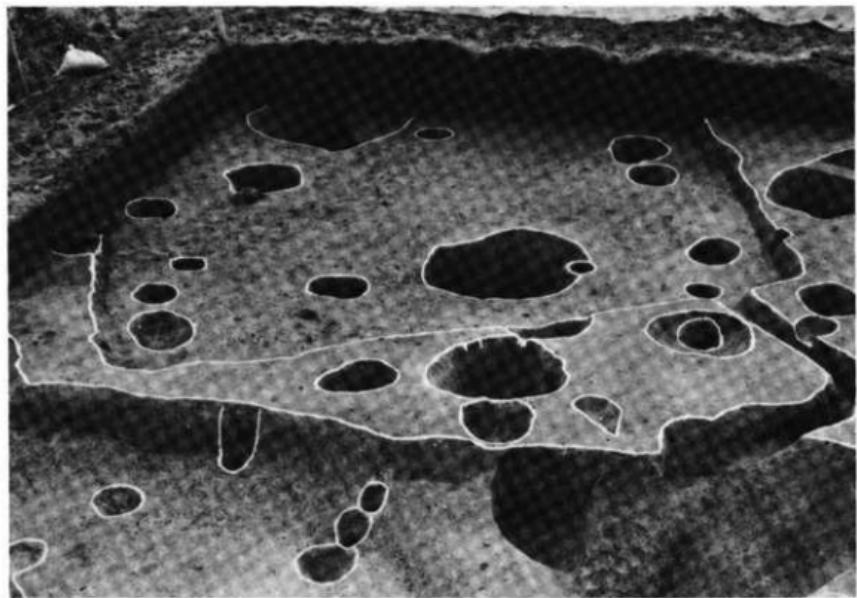
西より



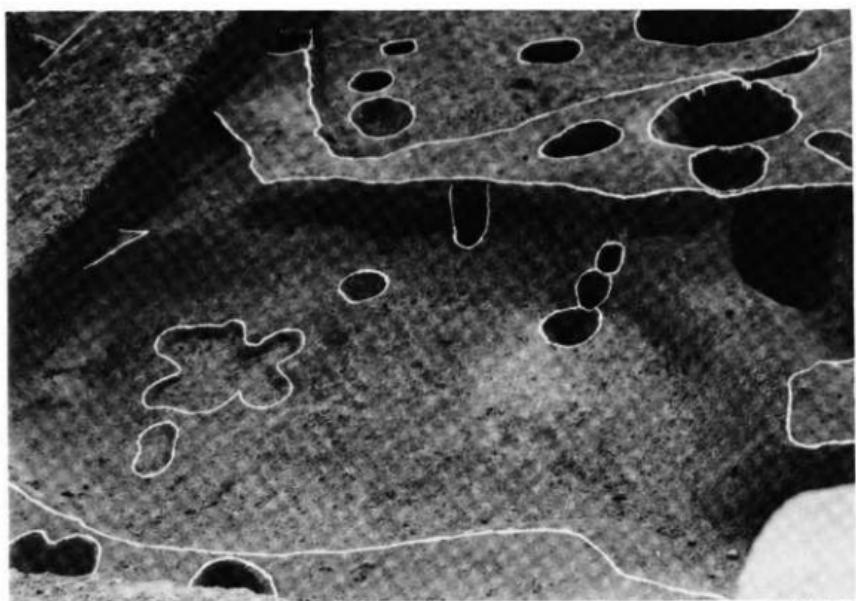
南より



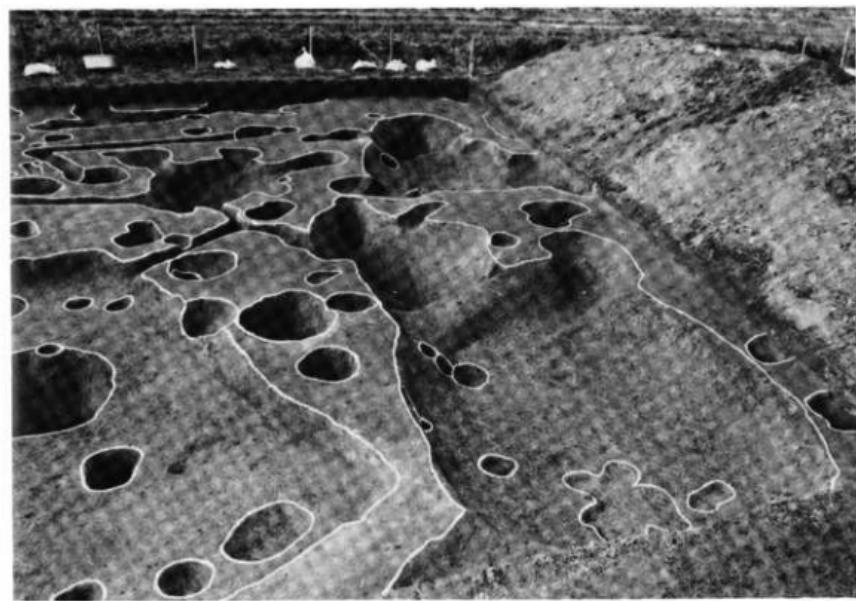
西より



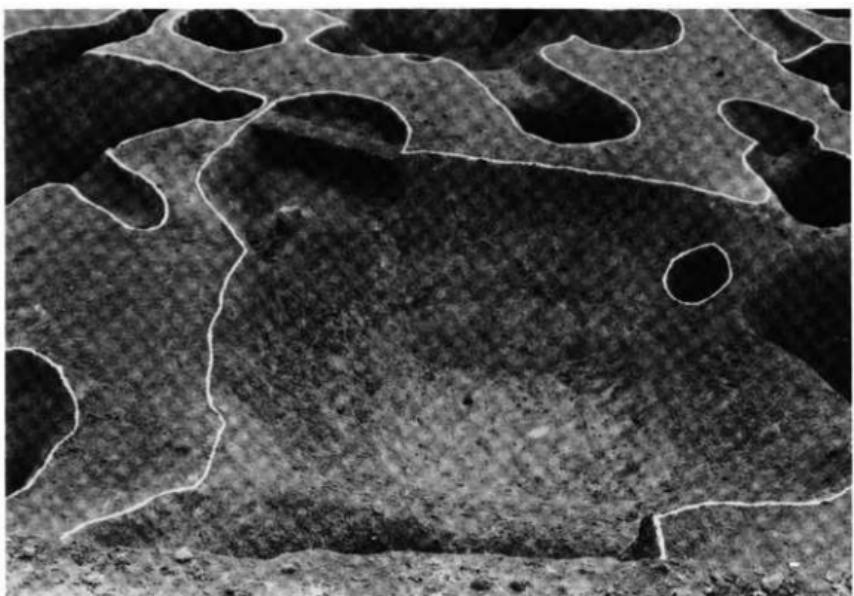
北より



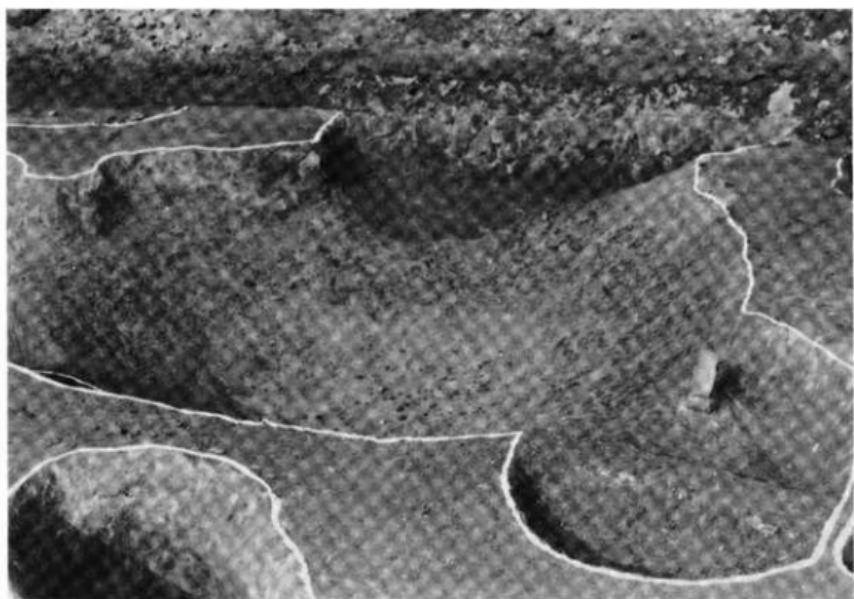
北より



東より

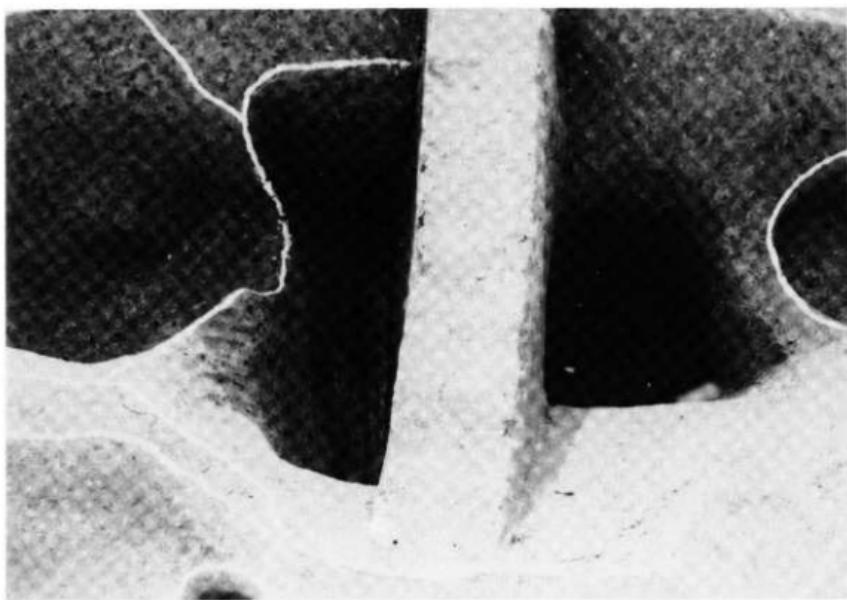


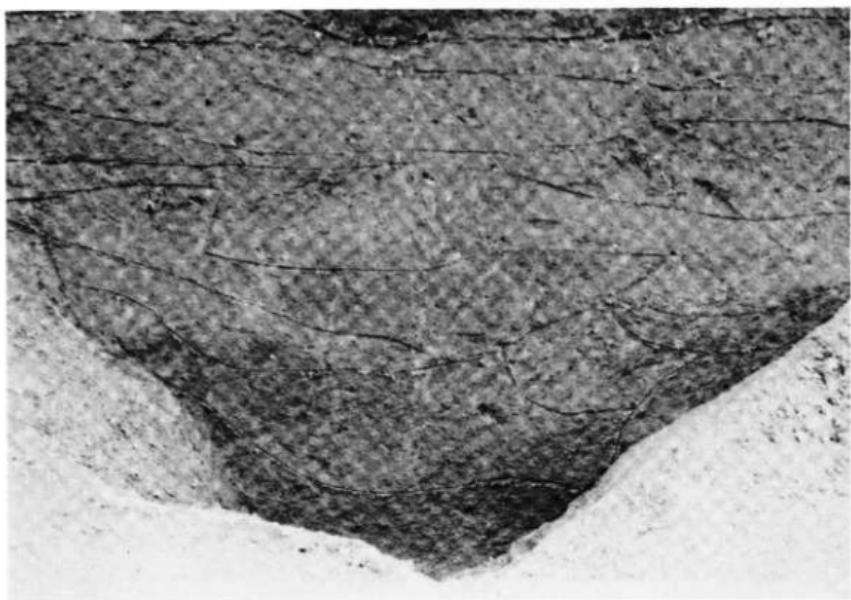
北より

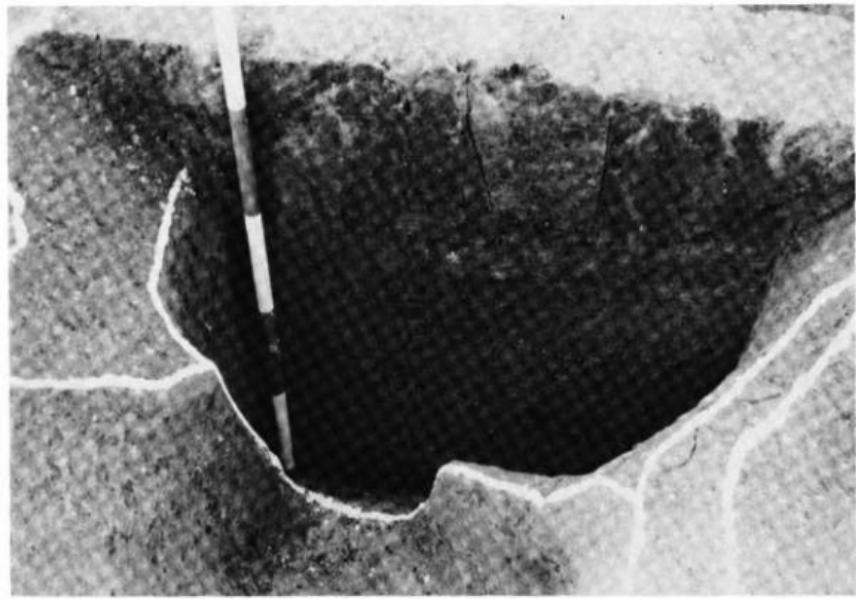
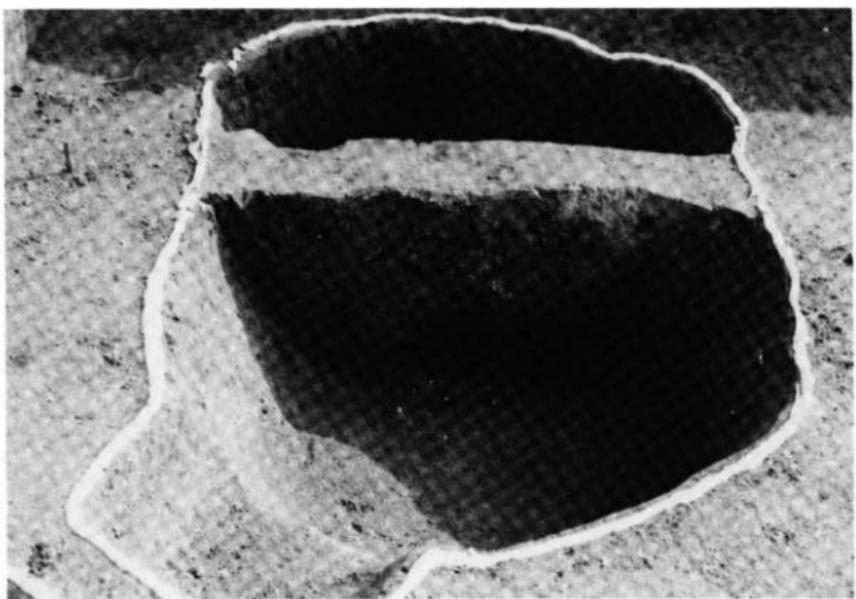


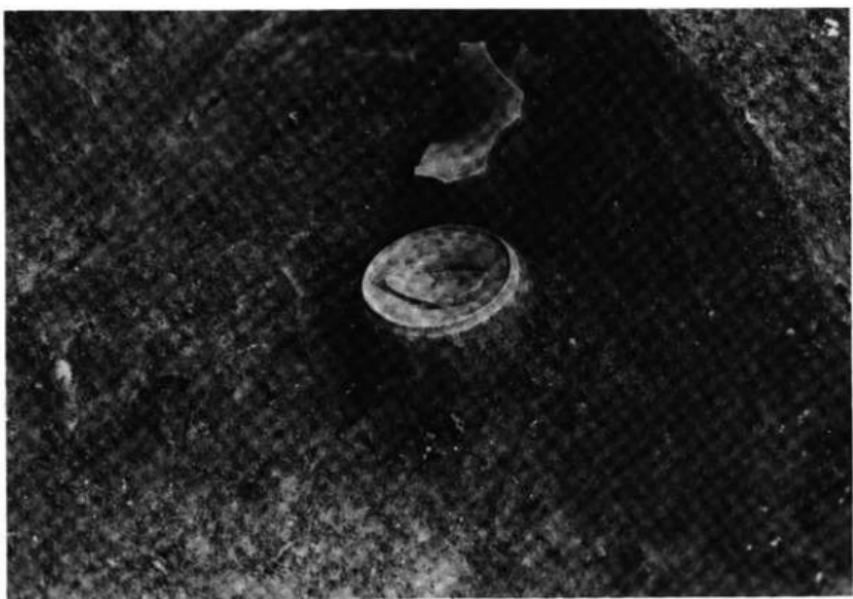
南より

図版22 挖立柱建物跡柱穴

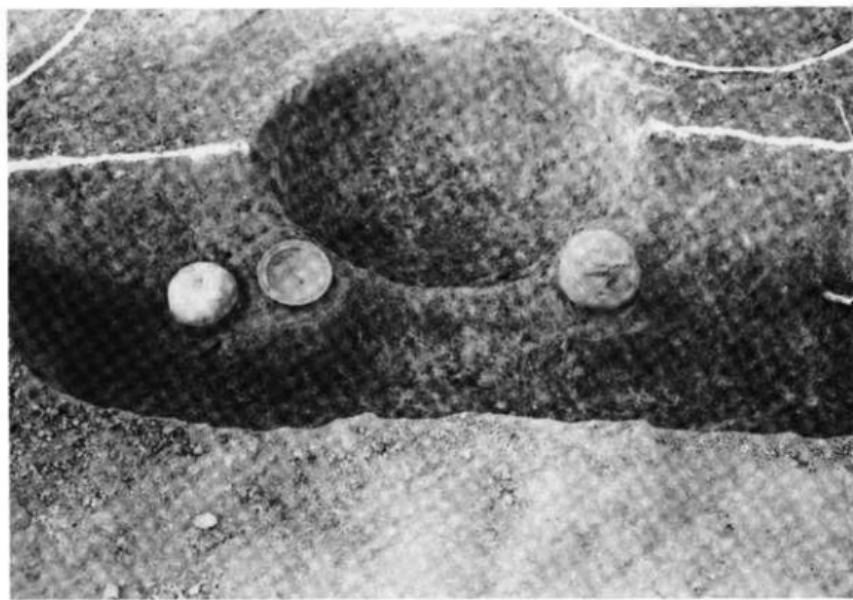




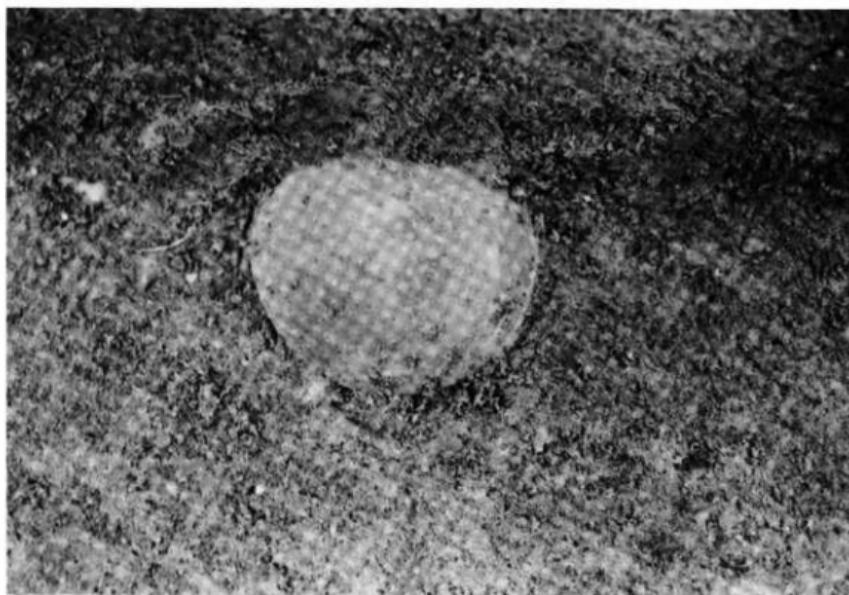




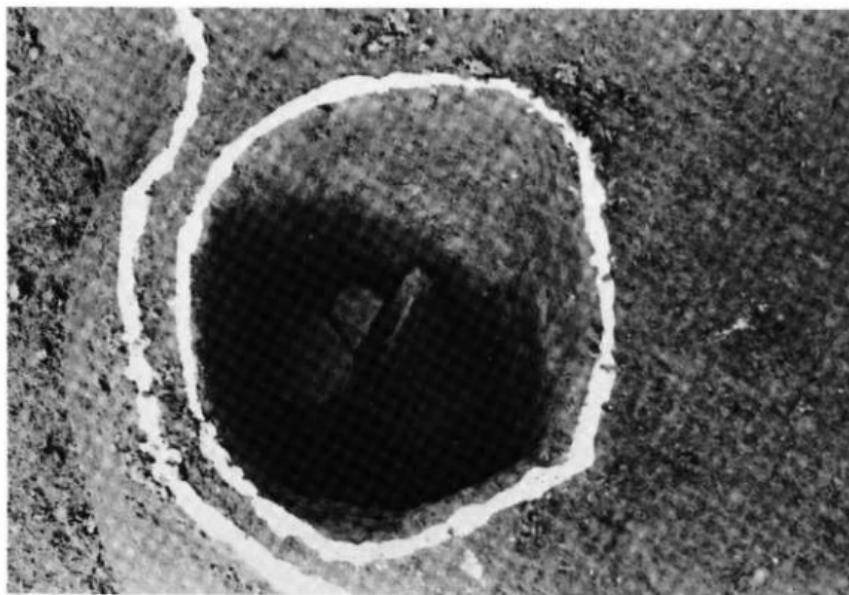
土壤1 高杯出土狀況



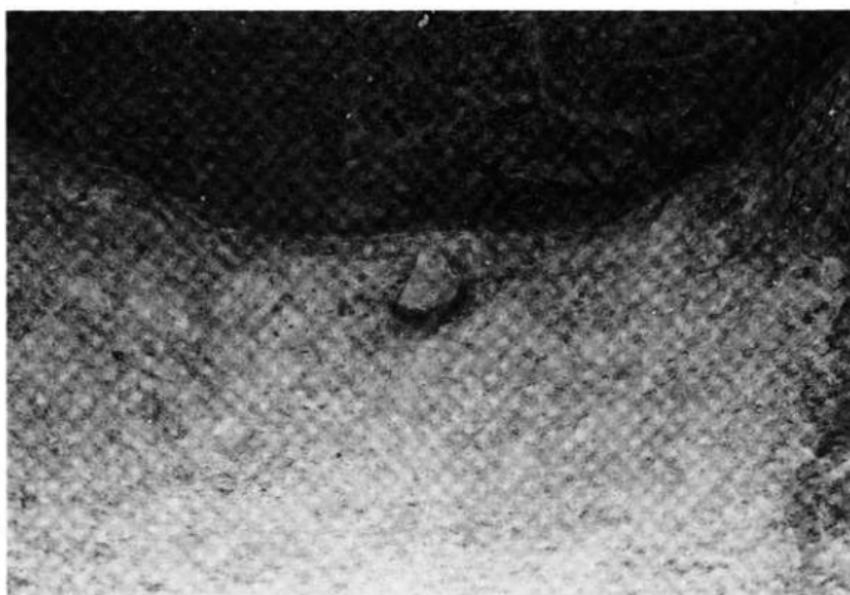
點穴式住居跡北壁蓋杯出土狀況



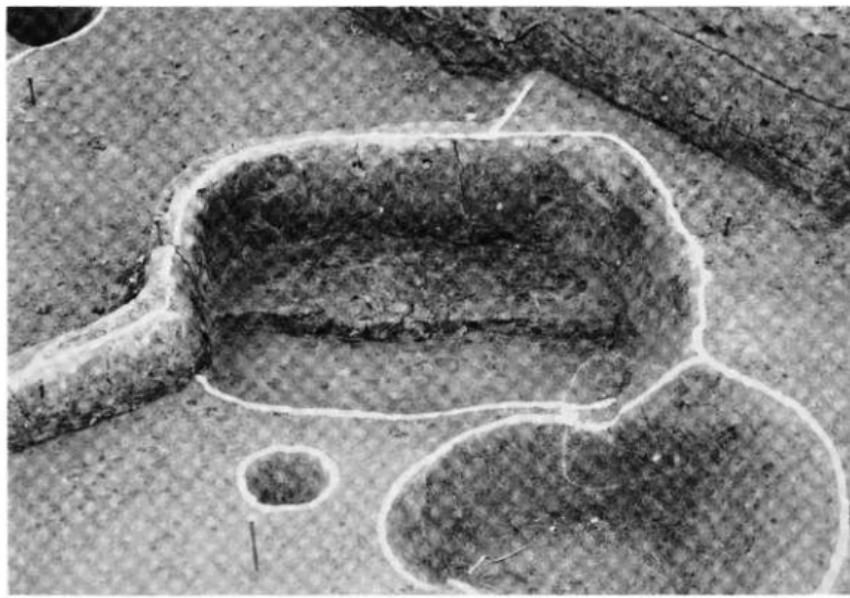
土師碗出土狀況



柱穴內瓦出土狀況

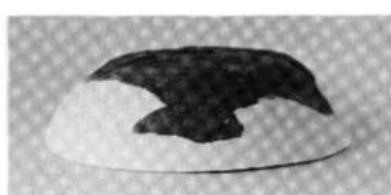
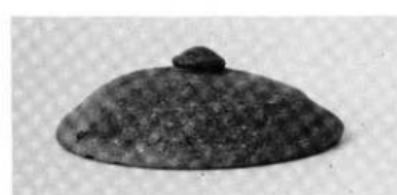


土壤 2 杯出土状況



柱穴内炭層検出状況







9



11



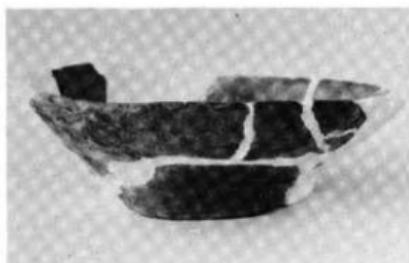
12



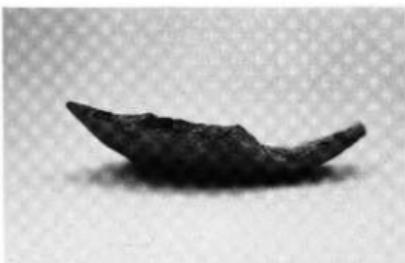
13



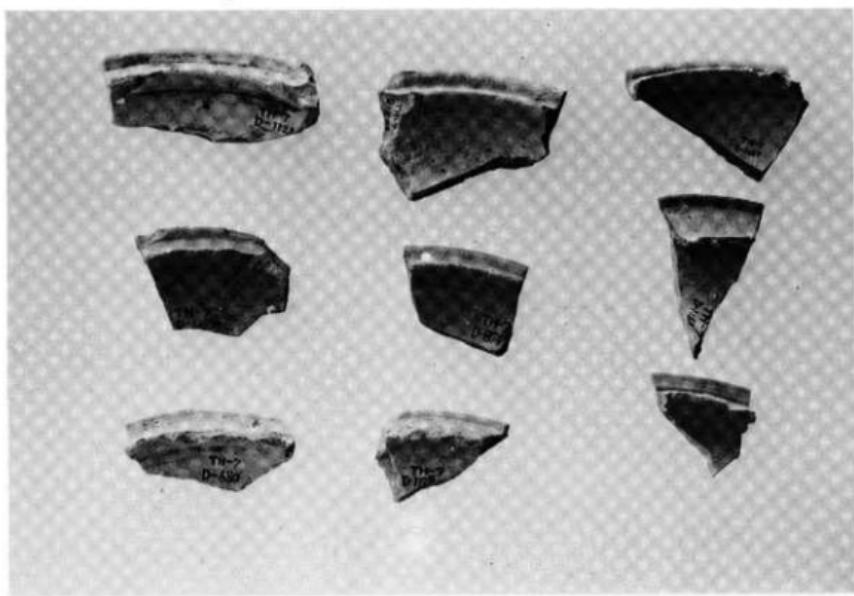
15



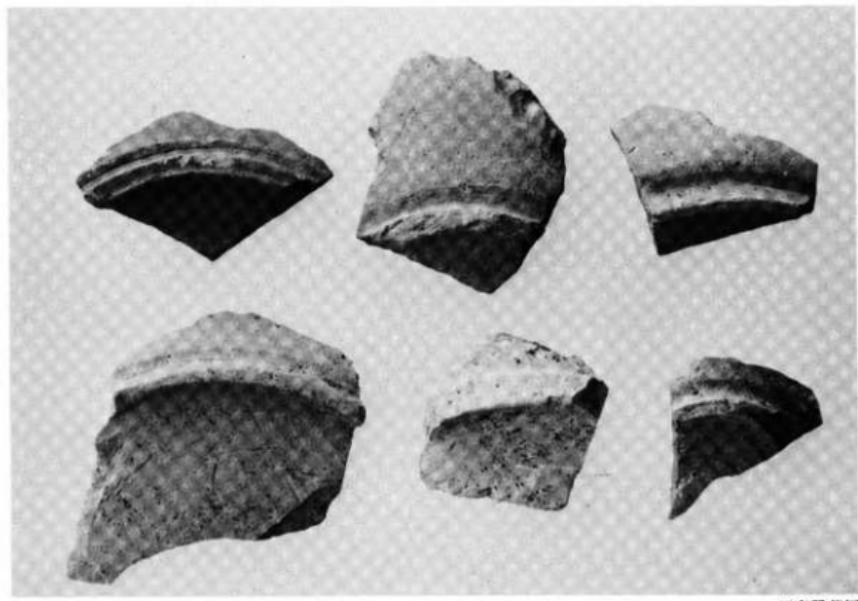
14



10



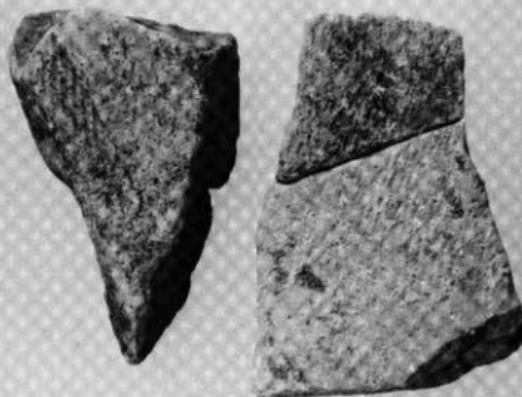
須惠器蓋杯



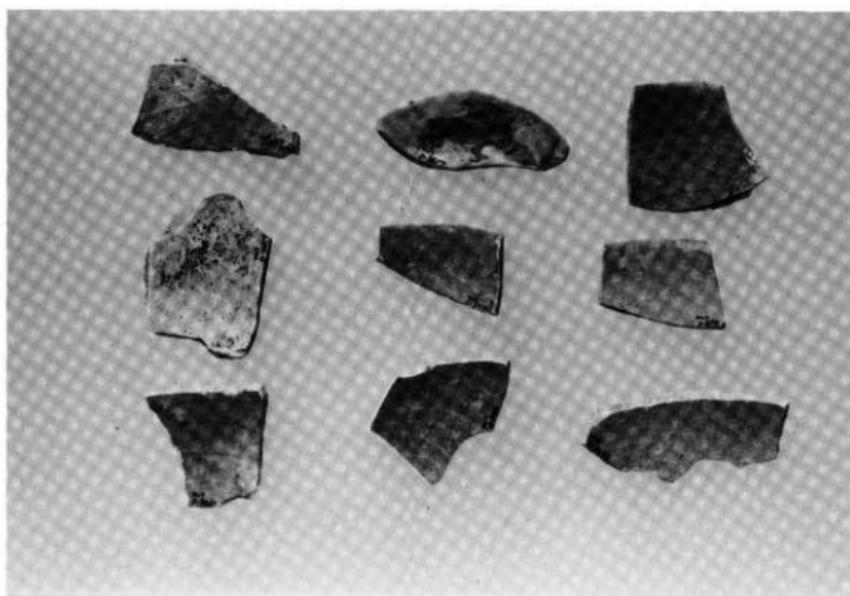
須惠器蓋杯



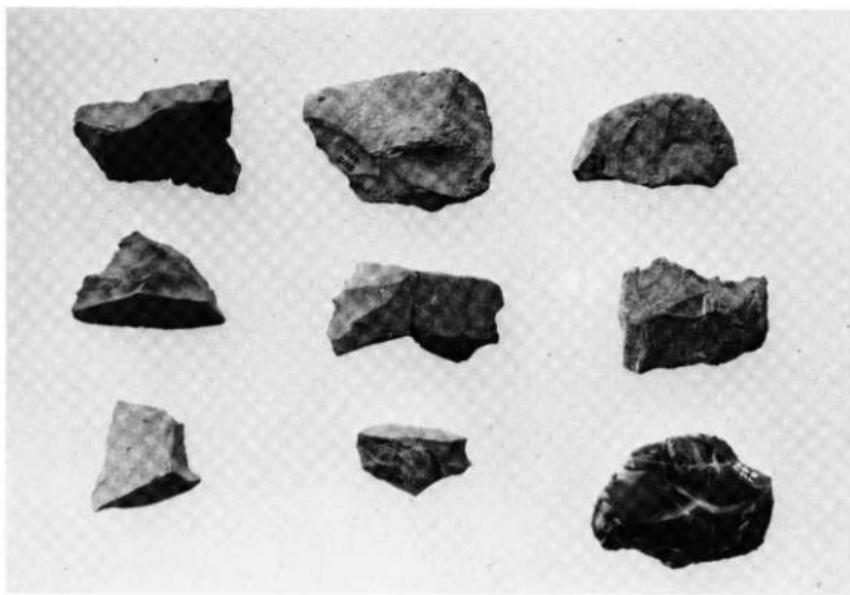
平 瓦



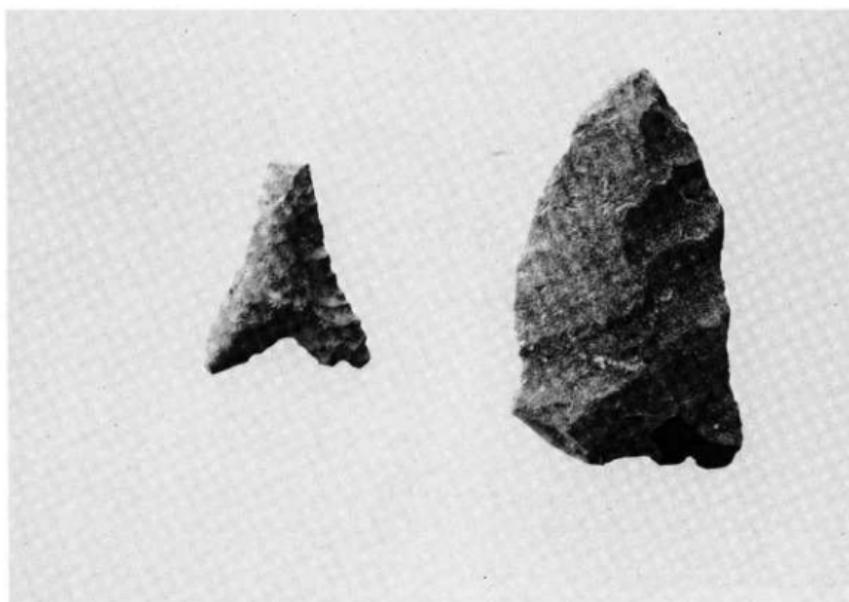
平 瓦



瓦 器



サスカイト・チャート削片



(大)



1



2

## 高宮遺跡発掘調査概要報告

昭和61年3月 発行

編集 神戸市教育委員会

発行 神戸市教育委員会

大阪府神戸市本町1番1号

